

転生したらまたしても猫娘だった件

炎の剣製

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

すべての生命力を使い切り天寿を全うした緑谷出久とフォウはあの世へと旅立とうとしていた。

しかし世界は、偉大な功績を残した出久をただで終わらすわけにはいかずに新たな世界に生まれ変わらせる。

謎の声とともに導かれた出久とフォウは新たな世界で産声を上げる事になる。

二人の新たな旅に幸先のあらんことを…。

『猫娘と化した緑谷出久』の続編で『転生したらスライムだった件』とのクロスオーバーです。

思いついちゃったものは仕方がないので不定期ですが更新していきます。

まず、前提として『猫娘と化した緑谷出久』を読んでくださればどういう内容か理解できますのでそこから先にお願いします。

『猫娘と化した緑谷出久』

<https://syosetu.org/novel/1533>
01／

『暁』様でマルチ投稿をしていますので、もしよろしかったらそちらも
よろしく願います。

目次

N O .	0 0 1	転生	1
N O .	0 0 2	スキルと状況確認	8
N O .	0 0 3	ドライアドのトレイニー	15
N O .	0 0 4	忠告と特訓	21
N O .	0 0 5	ゴブリンの村とスライム	27
N O .	0 0 6	牙狼族と事情聴取	33
N O .	0 0 7	フォウの説教	40
N O .	0 0 8	名付けと進化	46
N O .	0 0 9	リムルの目覚めと進捗	53
N O .	0 1 0	ドワルゴンに向かう道中	61
N O .	0 1 1	外伝・ヴェルドラの観察日記1	68
N O .	0 1 2	門の前での騒動	75
N O .	0 1 3	詰め所にて	82
N O .	0 1 4	鍛冶職人	89
N O .	0 1 5	エルフ達と思わぬ出会い	96

NO. 001 転生

……あの世という概念があるのなら出久とフォウはそこへと向かっているのだろう。

だが、魂の半分は分割されて残滓として弟子に与えた『ワン・フォー・オール』へと流れていった。

そして、それを見届けて本来の出久とフォウの魂はというと、

『フォウ……魂も半分は弟子に流れていったしこれでもう思い残すことはないかな?』

『そうだね、イズク。でも……これでイズクのお友達からもらった個性達も無駄ではなかったって感じだね』

そう……それは遡る事、まだ学生在学中にお茶子が言い放った一言から始まった。

「デクちゃん！ もしも……もしもだよ？ 最悪デクちゃんが私達よりも先を生きていく事になるんだったら……私の個性をその時にデクちゃんにあげる！」

「麗日さん!? それって!」

「わかっているの……デクちゃんは私達と一緒に同じ時間を生きて一緒に逝きたいっていう望みを持っている事は……でも！ もしもそれが果たされなかったら私はきつと後悔する……。死んでも死にきれ

んよ」

お茶子は目に涙を浮かべながらそう語る。

出久はそれでなにも答えられずにただ嬉しくて、同時に泣きたい気持ちになった。

お茶子が自分のためにここまで想ってくれている事を……。

「でもよー……それじゃどうすんだ？ おいら、個性の渡し方なんてできないぞ？」

そこで周りで聞いていた1―A一同も会話に参加してきた。

「確かに……ふがいないがオールフオーワンみたいに自由に個性を与えたり譲ったりはできないからな。そこ等辺はなにか考えがあるのかね？ 麗日君」

飯田に聞かれたお茶子は頭を少し捻って「うーん、うーん」と考えにはいるのだが、なかなか発言してこない。

それで業を煮やした爆豪が吼える。

「てめ、麗日！ 考えなしにそんな発言したのかオラツ！」

「いや、待つて！ ちゃんと考えはあるんよ？ ただ、それはデクちゃんにも相談しないとイケない話で……あと、もし皆もこの話に乗るなら血判状くらいは用意した方がいいくらいだから」

「血判状かよ!? また古い言い回しを知ってんな、麗日」

「血で結ばれた絆……深いな」

切島と常闇がそう発する。

確かに……血判状というのはヤクザとか義理人情系でしかももうお目にかかれないほどに時代的に古いものなのだから。

「お茶子さん、話してください。もし緑谷さんのためになるのですからわたくしは協力を惜しみませんわ！」

「やおももほどじゃないけど、ウチもその話は詳しく知りたいね」

「いいねいいね！ わったしもー！」

「私も私も！」

「聞かせてちょうだい。お茶子ちゃん」

女子全員ももう乗り気であった。

それで問われたお茶子は一回深呼吸をしながらも、

「もしも、もしもだよ……？ 私達が無事にヒーロー稼業を全うしてヒーローを引退したらもう個性なんて無用とは言わないけど使う機会なんて減っちゃうでしょ？ おじいちゃんおばあちゃん個性なんて使ったら体に響くのは請け合いだし……」

「そうだな」

「確かに……」

「でも、その時にデクちゃんがまだ生命力を使いきれずに今の姿のままだったら……みんな、どう思う？」

みんなにそう問いかけるお茶子。

それで全員は想像したのか苦い顔になった。

それはそうだ。

もうみんなおじいちゃんおばあちゃんの中、出久が一人だけまだ20代にもなっていない姿で取り残されているのだから。

「それは……嫌だな」

「うんうん。それは嫌だ。考えたくもない」

一人、また一人と嫌だ、と答える。

それを聞いてお茶子は考えていた案を言おうとする。

「だからさ……もしデクちゃんが一人取り残されてしまふんなら、私達の事を忘れないように、覚えていてほしいという想いをこめてせめて個性だけでもデクちゃんにあげようと思う……んやけど、どうかな？」

「いいと思うよ……でもさ、どうやって個性を譲渡するのか、それが問題だよ？ そこはどうすんの、麗日？」

「うん。そこはデクちゃんの『与える』個性が日の目を浴びてくるんよね」

それを聞いていた出久が、

「与えるが、なの？」

「うん、そう……。ある意味裏技に近い行為なんだけど、私達にデクちゃんが『与える』個性を『与える』」

「ッ！ まさか！」

「そう。一時的に『与える』個性を使えるようになったらすぐに自分の

個性を『与える』と一緒にデクちゃんに丸ごと譲渡する。こうすれば受け渡しはできるでしょ？ 与えるもデクちゃんに帰ってくるし一石二鳥だよ！」

私、必死に考えたんだよ！と言わんばかりに腰に手を当てて満足げな顔をするお茶子。

しかし、それで全員は妙案だと悟る。

「ケロ。お茶子ちゃん……とてもいい案だと思うわ。それならしてやれないことはないと思うわ。みんなもそれでいいかしら？ これはもしもの案だけど、出久ちゃんにとってはあり得ない話でもないのだから……」

『さんせい！』

クラスの一同が満場一致で納得したのでこうして最悪を想定して今後を生きていく事になった。

そして出久はそんなみんなの思いやりやりに涙を流しながら「みんな、ありがとう……」と言ったのだった。

その話は出久と親しい冴汰や壊理ちゃんにも行き渡り、母・引子や父・久にも了承される内容だった。

………そして、出久は全員の死に目が近い時に顔を出して個性を譲ってもらい、個性は思い出の形の結晶となった。

出久とフオウはそんな事を思い出しつつ、ふとある事に気づく。

『ねえフオウ？ ちよつといいかな？』

『うん……なんとなくイズクの言いたい事はわかるかも』

『うん……なんていうか。ずっとどこかに僕達とどまっていらない？』

そう、本来ならあの世にいくものだろう、さっさと進んでいくもの
だと思われたのだが、一向に進んだ感じがしないのだ。

なにかがおかしい。

そう感じた時だった。

【告。あなた方に生前の功績からギフトがあたえられます】

『ッ!』

そんな、どこからともなく聞こえてくる謎の声に出久とフオウは久
方ぶりに緊張をするという体験を味わった。

【あなたが持っている個性と呼ばれるもの。まずは統廃合をしていき
ます】

「なんて…?」

【『炎術』『爆破』『半冷半燃』『火を吹く』『ネビルレーザー』を統廃合、
ユニークスキル『氷炎乱舞』に統合、獲得……成功しました】

「えっ?」

【『爪の伸縮自在』『爪の硬質化』『脚力強化』『身体強化・怪力』『エン
ジン』『硬化』『シユガードープ』『複製腕』を統廃合、ユニークスキル
『金剛怪力』に統合、獲得……成功しました】

「まっ…」

『叫ぶ事による衝撃波』『イヤホンジャック』『ちよつとした物を引き付ける』を統廃合、ユニークスキル『絶対衝撃』に統合、獲得……成功しました』

「ええ……？」

『変化』『蛙』『尻尾』『テープ』『黒影』『透明化』『もぎもぎ』を統廃合、ユニークスキル『完全擬態』に統合、獲得……成功しました』
「ちよつ!？」

『猫の言葉を理解できる』『生き物ボイス』を統廃合し、エクストラスキル『全言語理解&服従』を獲得……成功しました』

「まつ!？」

『生命力を奪う』『創造』『無重力』『酸』『帯電』『人を巻き戻す』『水流放出』を統廃合し、ユニークスキル『仙術』を獲得……成功しました』

「まつて!？」

『個体名：フオウと『与える』『オートヒール』を生前の功績から融合しユニークスキル『治癒者ヘイヤスモノ』を獲得……成功しました』

「イズク!!」

「フオウ!!」

『五感強化』を進化……ユニークスキル『超感覚』に進化……成功しました』

『許容量キャパ限界を無くす』を進化……ユニークスキル『無限成長』に進化……成功しました』

「もう、なんなの!？」

『以上を持ちまして統廃合と進化が完了しました。そして新たにユニークスキル『妖術』を獲得……成功しました』

「もう、どうにでもして……」

【告。すべてが終了しました。それでは新しい世界でよい旅を……】

そして出久の意識は問答無用で薄れていくのであった……。

そして次に出久が目を開けた時にはどこかの森の中であった。

こうして、出久とフオウの新たな旅が始まろうとしていた。

NO. 002 スキルと状況確認

謎の声によって持っているすべての個性を勝手に統廃合されてしまった出久は意識を失った後に、再び目を覚ますとどこかの森の地面に横たわっていた。

「あ、れ……？ 僕は確か……」

しばらく意識が朦朧としている出久であったが、次第に先ほどの記憶がぼんやりとだがい思い出されてきていて、

「そうだ！ フォウ!? フォウ、いる!?!」

【うーん……なんか頭がズキズキする感じだよ、イズク〜】

「フォウ……ッ！ よかった……」

フォウの意識が確認できて一応はホツとする出久。

もしフォウがいなくなっていたら出久の精神は危うかっただろう。

それくらいには長年一緒に生活してきたのだ。

二人の絆をなめてはいけない。

「それでなんだけど、フォウ。状況確認しようか」

【そうだね、イズク。………とところでイズク、なんかちっこくなくなっていない?】

「は? え?」

それで出久は自分の手を見てみた。

見た感じ小学生という感じくらいの大きさの手のひら。

胸は当然なく感覚的にかなり小さいことが実感できている出久は、それで思わず、

「僕、子供になっちゃってるの!?!」

【イズク可愛いね。初めて会った時を思い出すよー。でも、今は猫娘の姿なんだけどね】

「そこらへんは生前と変わりなしってところかな……? でも、身体が小さいとこれからいろいろと大変そうだね……」

「そだねー」

少し深刻な顔になっている出久とは正反対になぜかフオウはとても軽い感じで応答しているために出久は少し調子がくるっていた。

「なんか、フオウは平然としているね……？」

「うん。なんていうか私、スキル化しちゃったみたいで今はイズクのすべてが把握できているからそんなに心配はしていないんだよね」

「スキル化って……さっき謎の声の人が言っていた統廃合って奴？」

「うん。今の私は『治癒者ヘイヤスモノ』ってスキル名らしくてどこからか勝手に知らない知識も流れてくるんだよねー。だから少し頭を空っぽにする気分になっていないとすぐに目を回しちゃうんだー」
「さきほどからの軽いスタンスもフオウなりの気遣いという事になる。」

それで出久はどうにか納得しつつ、

「そ、そうなの……。ま、まあいつか。それでだけど、僕達は所謂転生したって事で正解なのかな？」

「多分そう。服も少し質素だけど着させてくれていてよかったね。真っ裸のまま放り出されたら大変だったよー」

「そだね……服は重要だ」

なくはないだろうが今の出久の姿を見て欲情してしまう変態がないとも限らない。

だから服はせめてもの情けなのだろう。

「それと個性はどうなったの……？ さっきはかなり急な展開だったからあんまり実感がないんだけど」

「うん。なんか使えなくなっているものとか、そもそも統廃合で無くなっちゃったものも何個かあるけど、それでも使おうと思えば使えるよ。なんせイズクはかつて私が失ってしまった『妖術』のスキルを持っているからね」

『妖術』って、確かいろんな力を開発できる能力だよな？」

「うん。大体はそう。まあこの世界ではなんか『魔素』っていうものからできているみたいなんだけど……あんまし元の世界と違いはないから流して大丈夫だよー」

「フオウ……なんかフランクな性格になったよね」

【「そうだねー」

もしいまフオウの顔が見れるとしたらとてもお花畑が咲いてそうな笑顔を浮かべている事だろう。

出久の脳内にはそんなフオウの顔（猫顔？）が浮かんだとかなんとか……。

【「それじゃちやっちゃと今あるスキルを確認していきっか！」

「そうだね」

それでフオウは出久にも分かるように脳内のモニターみたいな感じに出久の脳に直接イメージを浮かび上がらせる。

—— ユニークスキル 『氷炎乱舞』

—— ユニークスキル 『金剛怪力』

—— ユニークスキル 『絶対衝撃』

—— ユニークスキル 『完全擬態』

—— エクストラスキル 『全言語理解&服従』

—— ユニークスキル 『仙術』

—— ユニークスキル 『治癒者へイヤスモノ』

—— ユニークスキル 『超感覚』

—— ユニークスキル 『無限成長』

—— ユニークスキル 『妖術』

【この九つのスキルがおおまかに統廃合されて新たに生まれたスキルだね。よかったね、イズク】

「よかったって……なんで？ むしろ無くなっちゃったものとかもあるんでしょ？」

【うん。でも、結局貰っても生涯使わなかった個性ばかりだから少しは使えるように進化していて嬉しいでしょ？」

「それもそうだけど……みんななどの思い出の絆でもあったから……」

【だいじょうぶ！ 元の個性のデータも私のライブラリーに保存してあるからいつでも閲覧できるよ！】

「ほんと……？それなら、まあ……いいかな」

【よし。イズクも納得したところで能力の確認といこっか。

まず一番上のスキル『氷炎乱舞』だけど、これは炎系の個性と轟の小僧の氷の力が同時に扱える力だね】

「いきなり轟くんに対して辛辣!？」

【まあまあ。そして主に使用する体の場所は両手だね。左手で氷。右手で炎。一緒だね】

「うん……」

【それに両手で爆破もできるし、レーザーも手のひらからどつちかの属性攻撃が放てるね。火を吹くは統廃合で使えなくなっちゃったかな。私的にもイズクが口から火を出す絵面は想像しにくいんだよねー】

「お父さん……」

思わず父の事を思い出して密かに涙を浮かべる出久。

【ちなみにスキル化に伴ってこのスキルも含めてデメリットがほぼなくなっただのが嬉しみだね】

「デメリットがなくなっただの？ それは確かに嬉しいかも……」

【うん。次は『金剛怪力』。これは身体強化・怪力の超強化版と言ってもいいかな。

やろうと思えばワン・フォー・オールみたいな使い方もできるよ。爪も出せるし、以前よりより硬くできるし】

【それは嬉しいかな。フルカウルがまた使えるのは役立つよ】

【そだねー。お次は『絶対衝撃』。これは単純にキャッツシャウトがより強化された感じだけど、叫ぶことで対象を引き寄せて固定化して衝撃を与え続ける事も可能だね。なぶり殺し♪】

「怖いよ、フォウ……」

まだフォウのテンションについていけない出久は少しフォウに恐怖を感じていた。

まあ今まで抑圧されていた面が少なからず表に出てきているのだ

ろう。

それもある意味良い事だ。

【気を取り直して、次は『完全擬態』。これも以前の様に姿を大猫から中猫、子猫に変えられる力があるけど、大事なのは統合された個性達が顔を出してきているね。

特に梅雨ちゃんの個性『蛙』は文字通り蛙になれるし、透ちちゃんの『透明化』を使用すると姿どころか気配、魔力すら隠せる力を秘めているね。

『テープ』も肘を変化させて使えるよ。

でも、代わりに『尻尾』『黒影』『もぎもぎ』はいいとこだけ受け取って使えなくなっただね。残念だけど……】

「そっかー……」

【そして『全言語理解&服従』。以前は猫だけにしか使えなかったけど、今は全動物とこの世界だと魔物にも作用するかな。服従させる力も強くなってるし。

あと言葉通りこの世界の言語を読みも書きも理解できるよ】

「それはいいね。魔物とかとも穏便に事を済ませたいし……」

【わからないよー？言葉が分かる分、余計話がこじれてしまうのはどこの世界でも変わらないから】

「確かに……気を付けて使わないとね」

それで気を付けて使っていこうと誓う出久であった。

【それではお待ちかね！ 私こと『治癒者へイヤスモノ』の出番です！

なんと以前は生命力を使用しないと回復できなかった傷とかが魔素を消費するだけでお手軽に治癒できるようになりましたー！

それにプラスしてもう分かっていると思うけど私の緻密なサポートもあるから魔素量にもよるけど死んでなければ欠損した部分も復元可能かも！】

「すごいよ、フオウ！」

【イズクに褒められたー！】

またしても花が咲き誇っているかのようなリアクションをする

フオウであった。

「あとはねー、『超感覚』に『無限成長』だけどね。超感覚は第六感が使用可能だし『無限成長』は魔素量も使えば使う程余計が増えていくね。地道だけど最強を目指せる能力だね。魔導書とかも読めば覚えられるし」

「なるほど……」

「そして最後になるけど『仙術』、なんだけど……」

そこで急に歯切れが悪くなるフオウ。

出久はどうしたのだろうかとうと心配になっていた。

「これに関しては私的に言えば未知数だね……」

「未知数……」

「統廃合された個性柄、自然界の力を自在に操れるイメージで間違いないけど、下手したら環境そのものを塗り替えてしまうかもしれない大それた力かも……」

「統廃合された個性が『生命力を奪う』『創造』『無重力』『酸』『帯電』『人を巻き戻す』『水流放出』だけど、ここから想像できるものを言うね。

たとえば酸の雨を降らしたり雷を落としたり……祈ればなんでも創造しちゃうし、他人に対して若返りも可能で、空も自在に飛べたり、自在にものを押し潰したり……水流の流れを変えて洪水をおこしたり、自然界から魔素エネルギーを奪うなんてことも可能かもね。

だからなにが出来るかかっていうと、なんでもできちゃうし恐ろしいスキルだから使いどころを考えてね？」

「確かに怖いスキルだね。わかったよ、フオウ」

これでスキルの説明は大体終了した。

あとはというと、

「それじゃあとは実際にこの森を歩いて行って誰かと遭遇するのを待つか、地道な作業をしていこっか。なんか本格的にRPGな感じになってきたね！」

「実際に行動するのは僕だけどね……はあ、せめて身体が大きかったらよかったのにね……」

「まあまあ。今のイズクも可愛いからいいじゃない♪ そのうち成長するわよ。手っ取り早く行きたいなら『完全擬態』で成長させちやえばいい事だし。今なら赤ちゃんからおばあちゃんまで自由に姿を変えられるから便利だよ？」

「うん。まあこれが今の僕の本来の姿みたいだからこれでなんとかやりくりしていくよ」

【やっぱりイズクって堅实的よね】

「まあね。とにかく歩を進めていこうか。道すがらスキルを実際に確認をしてもいいしね」

【そうそう。なんの縛りもないんだからコツコツいきましょ！使えばその分魔素も増えていくわけだし一石二鳥だね♪】

「そうだね」

フオウ先生のスキル講座も終わって出久は森の中を当てもなく進んでいくのであった。

「(突然あの場所に現れたと思ったら独り言……いえ、おそらく違いますね。それにあの強力な魔素量に聖なる気配……聖獣？ 近くコンタクトをとった方がよさそうですね……)」

出久の姿を出現時から見ていたとある人物がそう考えていたのであった。

出久はとりあえずどこかも分からない道を進んでいきながらもとあることをフォウに忠告されていた。

「イズク、とりあえずなんだけど体から漏れ出ている妖気オーラを抑えない？ そうでもしないとこら辺に住み着いている魔物とかが恐れてしまつて顔を出してこないよ？」

「そういうものなの？ わかった。どうすればいい？」

「そうだね。ちよつと自分の体から漏れ出ているオーラ……個性に言い換えれば未使用時状態にしておく感じかな」
「やってみる」

それで出久は抑えるイメージをしていると、フォウがなにかを感じたのか、

「あ、イズク。なんか新たにエクストラスキル『魔力感知』を覚えたみたい」

「……そんな簡単にスキルが増えてる物なの？」

「多分だけど……イズクが無意識的に『妖術』を使用して新たに覚えたんだと思う」

「なるほど……」

「うん。おかげで大体の力は対外的には感じられなくなったかな。この世界の普通の魔素量の基準がまだ分からないからしようがないけど……イズク、オールフオーワンみたいな感じだったよ。オーラが……」

「うっ……嫌な例えはやめてよ、フォウ」

「まあまあ。それと、今後からは私と話す際は心の声で話すといいと思う。他から見たら独り言を言っているちよつと痛い子だから」

それを聞いて出久はひどく感銘と同時にショックを受けた。

確かにそうである。

誰かに聞かれているかもしれない中でさきほどは結構一人でブツ

ブツ言っていたように見えていただろう。

それで少しばかり羞恥に悩まされていたのだが気を取り直して、

『そ、それじゃ……こんな感じでいいかな?』

『うん。いいと思う。これで内緒ごとは二人だけで話せるね』

『そうだね』

フォウと心の中で会話する術を得た出久はそれからどうしようかという話になって、

「とりあえず、思ったんだけど……妖術って便利だね。仙術がまだ未知数だからこれだけでもありがたいかも……」

【そうだね】

「でも……」

そこで出久は一回地面に体育座りになって座る。

そして回想するは残してきた子孫たちや弟子の存在。

「あの子たち、元気にしているかな……。僕の個性をいくつか継いで身に着けた子達はまだ生きているから大丈夫だけど、同じく猫娘になったのには笑えないけどね」

【可愛かったからいいと思うよ。私も我が子の様に思ってたし】

「うん。そっちはあまり問題ないと思う。出来る事はもうしてきたはずだし。」

問題なのは弟子の方だよなー。ワンフォーオールを引き継がせたのはいいけど、これから発現していく個性達に身体が追い付いて行けるか心配だよ。

「僕も先代達の個性が出た時は結構苦労したのに、そこにプラスして20個以上の異なる個性がぶわっと出てくるんだから……」

【イズクみたいに統廃合されて最適化されているわけでもないからね。たぶんただの人間の平均寿命だと全部会得するのは困難だと思うなー。廃人一直線……?】

「そんなことはないと思うけど、万が一耐えられなくなったらワンフォーオールを放棄していたらと思うと怖いよね……」

【大丈夫だよ。イズクが選んだ子でしょ? きつと立派に成長してくれているよ】

「そう願うばかりだね……」

そんな事を話していた出久とフオウ。

実際、弟子は出久が逝ったあとにさっそく猫娘に変化してしまつて色々と挫折しそうになっているのはここは言わぬが花である。

きっと、半分ワンフオーオールに宿つた出久の魂たちがなんとかしてくれるだろう。そう願いたい。

そんな時にその場に一陣の風が巻き起こつた。

「わっ？ なに!?!」

【イズク！ なにか来るよ!】

——そのお話、わたくしにもお聞かせくださいませんか？

その言葉とともに風が止むとそこには緑の髪をしたどこか神秘性を伴つた感じの女性が立っていた。

その突然の登場に出久は一瞬言葉が止まってしまっていた。

女性はニコリと笑みを浮かべながらも、その瞳は真剣そのものであった。

「あ、あなたは……」

「わたくしの名はトレイニー。このジュラの大森林の管理者であるドライアド樹妖精です」

「ドライアド!? それってファンタジー世界では結構有名な……」

「あら。わたくしの存在はご存じなのです。それよりお聞かせくださいませんか? 名も分からない聖獣様。あなたはどのような理由を持ちましてこのジュラの森に出現したのですか?」

「せ、聖獣……? 僕が?」

「あら? 自覚はないのですか? あなた様からかなりの聖なる気配を感じられるのですが」

「そうなんですか？ フォウ、わかる？」

「『そうだねー。多分生前の功績なんかでそんなものを纏っているのかもねー。イズク、かなりの人数救ってきたわけだし』」

「それで出久も自覚する。」

「万単位での人の命を救ってきたわけだからそのくらい当然なのかな、と……。」

「その、フォウさんというのはどなたですか？ この森に現れた時から独り言のように会話を成されていますがなにかのスキルなのでしょうが？」

「えっと、はい。僕の昔からの相棒であり、今はスキルの一つで『治療者<イヤスモノ>』というものになったらしいんです。」

「それと先ほどの突然現れたというのは、信じられない話だとは思ってんですけど多分僕がこの世界に転生してきた瞬間だと思っんです」

「それを聞いたトレイニーは驚愕の声を上げる。」

「まあ！ あなたは転生者だったのですか」

「あれ？ 意外な反応……もしかして僕以外にも転生者って結構いるんですか？」

「まあいるといえばいると思います。わたくしは会った事はありませんが……他にも異世界から渡ってくる異世界人などの存在も確認できていますね」

「そうなんですか……」

「それで、あなたの事はなんとお呼びすればいいですか？ 転生してきたばかりなのでしたらまだこの世界での名はないのでしょうか？」

「名前……？ 生前の名前でしたら『イズク』がありますけど……この世界って名前って結構重要なんですか？」

「はい。この世界は人間は普通に名付けられています。魔物などはほとんどは名前を持ち合わせていません。そしてもし名前があるのでしたらその魔物はネームドと呼ばれ、誰かの眷属に力とともに名付けられるものが多いです」

「そうなんですか……」

「はい。しかも名付けは魔素を大量に消費するためにほとんどの場合

は力あるものしかできない行為なのです」

そのトレイニーの説明を聞いて出久は納得しつつも、思った。なぜ初対面の自身にここまで丁寧の説明してくれるのかと。

「あの、トレイニーさんはなんで僕にそこまで丁寧に説明してくれるんですか……？」

「ふふふ……なんででしょうね。ですがあなたの聖なる気配も関連してか悪人ではないとわたくしの勘が告げているのです」

「はあ……それはどうもありがとうございます」

「よかったね、イズク」

穏やかな笑みを浮かべているトレイニー。

とりあえずトレイニーからは良い評価を貰っている事に出久は安堵しつつ、するとトレイニーがある質問をしてきた。

「それですが、もしよろしければ前の世界であなたは何をしていたのかを聞かせてもらってもよろしいでしょうか？ その聖なる気配を出せる意味もそれで分かるかもと思うのです」

「いいですけど……ちよつとフォウと相談させてください」

「わかりました。しばし待ちますね」

トレイニーからそう言葉が返ってきたので、出久は心の声でフォウと会話をする。

『それでフォウ。どうする？ 僕としてはトレイニーさんは信用できると経験上分かるんだけど』

「イズクがそう感じたなら私が意見する事なんてないよ。それにこの世界に来て初めて出会う人（？）だしなにかと情報も必要となってくるから、私としても話すのは賛成かな」

『そっか。うん……それじゃ掻い摘んで話すね』

それで出久は決心しつつ、トレイニーに向き合って、
「それじゃ話しますね。僕の生前してきたことを……」

「はい。ありがとうございます」

「僕は前の世界ではヒーローをやっていました」

「ヒーロー……ですか？」

それで出久は説明をしていく。

個性社会となつて一回荒廃した世界で、それでも立ち上がって頑張ってきた前の世界の事を。

そして自身は色々な人の助けもあつてたくさんの人を命を救ってきたことなど……。

搔い摘んで簡単に説明が終わると、トレイニーはどこか感動しつつ、

「なるほど……イズク様のその聖なる気配の原因は過去の功績だったのですね」

「多分ですが……なにぶんまだ転生してきてそんなに経っていないのでフォウとともにまだこの世界がどんな世界か知りません。」

それに多分ですがもう前の世界の既成概念とかはこの世界では通用しないと思うんです……」

「そうですね。この世界にはヒーローを自ら名乗る人は恐らくいないでしょう。勇者や英雄、魔王などはいませんが」

「ですよねって……え？」

トレイニーからさらつとだが出たとんでもない単語に出久は思わず目を丸くさせる。

【やっぱりRPGの世界だね……】

フォウの心から思つて呟いた感想がすべてを物語っていた。

それからトレイニーに案内されて結構神聖な場所へとやってきた出久はというと、

「おそろくですが、今のイズク様がジユラの森を普通に歩くのは魔物たちにとつて悪影響になるかと思われるのです」

「どうしてですか？ 魔力感知でもうあんまりオーラも漏れ出ていないとは思うんですけど……」

「いえ、まだ転生してきたのに一日も経過していません。ですからイズク様はまだこの世界の常識を知りません。わたくしが懸念をしているのは生前は人々を救い続けてきたイズク様が、弱者は淘汰され強者が睨みを利かせている魔物社会に適応できるかの心配をしているのです……一応聞きますが人を殺した経験などはないのでしょうか？」

「うっ……はい。救いはしても人殺しをしないのはヒーローの条件でした。さもないとすぐにヴィランになってしまいますから」

そう、出久はその事を前の世界で嫌という程実感している。

ヒーローは人殺しを禁忌とされていてあくまで裁くのは警察の組織であり、半面ヴィランはそんなヒーローの常識を逆手にとつて時には「ヒーローが人殺しをするのか？」と脅してそんな自分らは平然と人を陥れて殺す……。

そのくらいに世界は混沌に満ちていたのだ。

個性が始まる前の世界をお話で聞いたことがあるが、それでも人々は欲望を抑えてなんとか日本は比較的事件が少ない国だと言われていた。

だが、個性の出現とともに人々を縛る枷は壊れてしまい欲望が満ち溢れる世になった。

その時代を象徴するのはやはりオールフオーワン。

「ですので酷な話ですが信頼できる居場所ができるまではイズク様は森を出歩かないほうがよろしいと思うのです」

「お話はわかりました。ですけど、それだと僕はこれからどうすればいいんですか？ その信頼できる人が来るまで待つのは別に構いません。でも、殻の中に籠るのもなにか違う気がするんです」

「わかっています。ですからまずはイズク様はご自身のスキルをしっかりと会得して、いつか来るであろう信頼できるお方が現れるまでに覚悟を決めておいてほしいのです」

「覚悟……」

覚悟とは……？

「それって、まさか……」

「はい。イズク様にとつてとても辛いお話ですが、殺し殺される覚悟です。この世界はひとたび争いが起きればそこに法の秩序など存在しません。」

あるのは勝てば正義、敗者は淘汰される……そしてジユラの大森林の周辺には様々な国がありますが、けっして一枚岩ではなく常に睨みを利かせているようなものです。

幸いジユラの大森林はいまは暴風竜ヴェルドラ様の加護がありますからかうじて争いは起きていませんから大きな戦いに巻き込まれることはないでしょう。

それでも弱い魔物は狩りの対象にされることはよくあることです」
「……………」

出久は無言で決して誇張でも何でもないトレイニーの話をじつくりと聞いていた。

今後の役に少しでも立たせられるように。

「……………ここまで言えばもうイズク様も分かると思いますが、もうイズク様の元の世界の常識などこの世界では通用しません。当然話し合えば和解できることもあるでしょうが魔物達はそう簡単に話し合いに応じてくれることも稀でしょう。」

イズク様のスキルで服従させればなんとかなるでしょうが、まずは腰を据えてこの世界を知る事から始めてみたらいかがでしょうか。幸いわたくしどももお力添えできますので、時間をかけて決心がつき

ましたらここをでて魔物達と共存していくのもありだと思えます」

「そうです、ね……」

「イズクー、今は耐えの姿勢だね」

なんとか納得していた出久とフオウであったが、それはそれとしてトレイニーは出久に対してここまで過保護になっているのには理由があった。

トレイニーのかつての主に似て聖なる気配を持っている出久の事をどうしても放っておけず、そしてその聖なる光を今はまだ濁す行為はしたくないというのが本心でもあったからだ。

そんなトレイニーの思惑通り、出久はしばらくこの場でスキルの修練や世界について学ぶことに専念する事になった。

出久の力は下手したらどこかの国に目を付けられてしまうかもしれないくらいに貴重で強力だ。

だからまずは自覚してもらわないとトレイニーとしても出久をただで野放しにはできないという事であった。

——それから出久の修行が始まった。

スキル『仙術』を使い、雷雲を発生させて自らに落とすというある意味荒業。

普通ならショック死ものだが、上鳴の個性である『帯電』も能力はしっかりと残っているためにまずは貯蔵量を増やすという試みをしていった。

幸い『無限成長』で電気の蓄積量はどんどん増えていくので「ウェーイ」という事にはならない。

さらには使えば使う程魔素量もどんどん増えていくために本当の意味で一石二鳥を実現している。

上鳴の時の様に大容量バッテリーを使わずとも自家発電できるよ

うになった出久はあらゆる意味で上鳴を上回っていた。

【イズクー。なんかスキル『帯電耐性』が身に着いたよ】

「まあそりやそうだよね……」

【他にも『氷雪耐性』に『炎熱耐性』、『水耐性』も身に着いたし、あとは風耐性とかも覚えたらいいかもねー。『妖術』で増やす?】

「いや、今はその場その場で増やしていこうと思う。やっぱり実戦で体験した事を教訓としてすみやかに対処した方が身に着くのが早くなると思うし」

【確かにねー】

出久は生前からの特訓の成果で個性『猫又』に関連するスキルに関しては大体すぐさまコントロールできる。

しかし、みんなからもらった個性の操作に関しては絆としてもらっただけで訓練などはしていないために、今から習得していくスタイルなのだ。

特に今は炎と氷のレーザーに関して考え込んでいる。

うまくすれば二つのレーザーを集束して大技を放つことも可能かもしれないからだ。

技が完成して命名するとすれば『ビッグオン・アタック』だろうか……?」

そしてさらにここに帯電している電気を合わせれば炎・氷・雷の三つの属性が合わさったレーザーが放てるかもしれない。

他にも『妖術』を使えばやりようはいくらでもあるので出久としては生前に書いていたヒーローノートの記憶をフォウから脳内に再現してもらって訓練法などを学んでいった。

………そんな、出久の訓練している姿を遠目で見ていたトレイニーはというと、

「まさか……イズク様はそのうち魔王にも匹敵するほどの魔素量と強さを獲得するのではないでしょうか……?」

と、成長著しい出久に対してある意味で畏怖の念を抱いていたり。

同時に、

「(だからこそ、わたくしがしつかりと正しい道へと先導して差し上げないと……ッ!)」

と、この世界の知識を教える際にはしつかりとしないと思っっていた。

ただでさえ出久は真面目で勉強熱心な性格だから余計にトレイニーの教育者としての顔が出ているとの事。

……さらに付け加えると、出久の身体的成長は推定10歳くらいから全然伸びていないために小さい子供を育てている感じみたいで母性を刺激されるとかなんとか……。

ただ、トレイニーは出久の話を聞いているはずだから忘れていていると思うのだが、出久は生前に子を産み親になって育てるなどしているために……子育て経験に関してはトレイニーよりあったりなかったりするのだ。

そこはもう本当に言わぬが花である。

……それから出久は特訓を半年以上続けていたある時であった。

「ッ!」

突然トレイニーの顔が驚愕に染められていた。

「トレイニーさん!? どうしましたか!!」

「あ、その……暴風竜ヴェルドラ様の気配が消えてしまったのです……」

「ヴェルドラ様って……世界に四種しかいない魔竜で今は洞窟に封印されているって話の……」

「はい。そのはずなのですが……なにかが起きたのかもしれませんが。イズク様、申し訳ありませんが教育に関してはここまですりそうです。ヴェルドラ様という抑止力が消えたことによりジュラの大森林に生息する魔物達は動揺し、領地争いが起きるかもしれません。さらには……」

「諸外国や魔王達も動き出すかもしれない、と……」

「はい。よく学んでいますね。その通りです。ですからイズク様には申し訳ないのですがスキルの訓練もだいたい済んだでしょうし、視察の意味も込めて魔物の村などを見て周ってほしいのです。なにごとも経験ですね」

「わかりました」

「あ、ですがあまり大きな行動はなさらない様に……。目立てばそれだけ敵を生むことになるから」

「はい」

「そして、もしかしたらこのヴェルドラ様の消失はなんらかの力が働いていると思うのです。わたくしも姉妹達を集めて情報を集めますので、イズク様もくれぐれもお気を付けください」

「はい。トレイニーさん、今までお指導ありがとうございました」

「そんな……勤勉なイズク様だったからスムーズにできたのです。わたくしも貴重な経験が出来ましたのでお互いさまという事にしておきましょう」

「そうですね」

それで出久は神聖な森からでることになり、トレイニーに見送られながらもこれからの行動について考えるのであった。

【それじゃイズク！ はりきつていこう！】

「そうだね、フォウ」

……そして、出久はのちほどにとあるスライムと出会う運命にある。

その結果、どう変化するかはまだ誰も分からない。

NO. 005 ゴブリンの村とスライム

「(ふむ。でも、魔物の村を搜索と言ってもまず村がどこにあるのわからないんだよね)」

出久はこの広大なジユラの森の中をひたすら歩きまわっていた。

道中でなぜか襲ってくるトカゲやら蛇やらクモやらの巨大なモンスターがいたが穏便に『全言語理解&服従』を使い、怯えさせて退散してもらった。

オーラを駄々洩れにさせれば近寄ってこないだろうが、トレイニーの言いつけであまり力を出しすぎないようにと言われているので出久は素直にその約束を守っていた。

しばらくするとなにやら貧相ではあるが小さい村のようなものが見えてきた。

そこではなにやらゴ布林らしき者たちが一か所に集まって誰かにお辞儀をしている姿が見えた。

『ねえフォウ。なんかあのゴ布林達、見間違いでなければスライムにお辞儀していない?』

『そうだね、イズク。少し魔力の気配を解いて話しかけてみる?』

フォウの提案で出久は魔力を少しだけ滲みださせると途端にゴ布林達はこつちへと振り向いてきた。

「グガッ! 何者だ!!」

「まさかももう牙狼族が来たのか!?!」

と、もう大騒ぎになっていた。

「なんかタイミング悪かったかな……?」

「うん。少し勘違いしているみたいかもね」

それで出久はまたしても『全言語理解&服従』を使用しようとしたが、それより前に、

「落ち着け! お前たちはこの俺が守るっていったろ! 任せろって!」

そんなどこか中性的な声が聞こえてきたので、とりあえず出久は構

えを解きつつも、

「あのー、すみません……なにかお取込み中でしたか？」

と、下手に出てなんとか話し合いに持って行こうとしていた。
ただ。

「猫娘!? かあいいなー……」

ゴブリンの群れの中から出てきたスライムの一声がそんな反応だったために出久は「うーん？」と首を傾げる事態になっていたとか。

俺、スライムのリムル。

なんかかんやあつてつて言ってもいろいろあつただけど、この世界に転生してきて暴風竜ヴェルドラとも友達になったあとに、ヴェルドラの封印を解除するためにヴェルドラを胃袋に捕食したあとにスキルを磨いて、封印の洞窟を出た後にこうしてゴブリン達の事を守るって約束したばかりなのに、なんの気配もなく突然小学生くらいの子供の猫娘が現れたので興奮していた。

だってさー、つぶらな瞳に少し素朴っぽい感じの顔立ち、それでも可愛くて猫耳がチャーミングであり、二股に分かれた尻尾もゆらゆら揺れているカワイイ！

っていうかさ、大賢者。

なんでこんな子が近くににいるのに知らせてくれないのさー？

【告。敵意が感じられなかったために知らせるほどでもないよ】

そーかい。

ま、敵意がないなら都合だな。

この子もはぐれちゃったのかな？

できればゴ布林達と一緒に保護したいと思うんだけど。

【解。魔素量がかなり強力和見られます】

そうなの？

ま、いいけどさ。

それじゃ話しかけてみるか！

「あのー……」

おっと！

俺としたことがあちらから先に振られてしまうとは。

それじゃ改めて、

「俺、スライムのリムル。悪いスライムじゃないよ？」

「ぷふっ……」

おや？ なにやら意外な反応。

ここで笑いが起こるといふ事はなにやら知ったようなフレーズでも知っているのかな？

「笑うことないじゃないさー」

「あ、ごめん！ なんかない草がちよつとユーモアあつて面白いなつて。それと自己紹介してもらつて悪いと思うんだけど僕、まだこの世界では名前はないんだ。

だから今は『イズク』つて名乗ってるの」

「イズクちゃんね。わかった！ よろしくな！」

それにしても、イズク、ね……。

なんか日本人みたいな名前だな。

あとで二人つきりで話し合つてみるのもいいかもしれない。

もしかしたら俺と同じで転生者かもしれないしね。

「うん。ところでなにやらお取込み中だったみたいだけど、よかつたら聞かせてくれないかな。なにか手伝えるかもしれない」

「そうだなー……村長。どうする？」

村長を呼ぶと俺の近くまで寄つてきて、

「リムル様、構いませんぞ……。もう敵意がないのは分かり切つておりますから。イズク殿、よろしくお願いしますぞ」

「うん。村長さん」

それから俺とイズクちゃんは村を案内されているんだけど、どうやら怪我人がいっぱいいるらしくて……話によると牙狼族にやられたらしく、唯一ネームドのリグルという奴もやられてしまったらしい。

どうやらそいつのおかげでなんとか村を防衛できていたとかで

……。

うーん、死んじゃったのか。

それじゃ今生きている奴らだけでも治してやるか！

そう提案しようと思ったんだけど、

「あ、それじゃ僕が癒そうか？」

なに……？

イズクちゃん、癒しのスキルでも持っているのかい？

でも、まだどうか分からないから。

「待った、イズクちゃん。まずは俺の方から試してもいいか？」

「試すって？」

首を傾げるイズクちゃんはやはり可愛いなあ……。

つと、呆けている場合じゃないな。

俺はすぐさまスライムボディを使って怪我人の一人に覆いかぶさって体の中に入れて回復薬をぶっつけた後に外に放り出す。

すると思っただ通りに怪我人であるゴブリンは目を回してはいるが完全回復していた。

「わあ……。すごい回復力だね。なにをしたの？」

「フッフ。まだまだ内緒さ。でもこれで俺も試すことができたんで、

お次はイズクちゃんの力を見せておくれよ」

「うん。いいよ」

それでイズクちゃんは足とか腕とか欠損している子達の方へと向かっていった。

あれ……俺の回復薬でも治るのかな？欠損再生って高等なもんじゃね？

だけど、そんな俺の不安とは裏腹にイズクちゃんから優しい光が溢れてきて体の傷はもちろん欠損していた腕もまるで逆再生かの如く生えてきた。

すごっ!?

これもスキルなのか!?

「あ、あれ？ 腕が!!」

「よかったね」

「ありがとうございます！」
「すごいなあ……。」

こんな高等なスキルを使ったっていうのに全然疲れている様子じゃない。

【告。治癒のスキルを使ったと同時に彼女の魔素量が上昇しました】
はっ!?

そんな簡単に魔素量って増やせるの!?

普通使ったら減るもんじゃないのかなあ……。

なにか、特殊なユニークスキル持ちなのかな？

あとでどんなスキルか聞いてみよう。

それから出久は治癒を続けていき、全員癒し終わる頃になにやら先ほどリムルが命令しておいたのか木で作られた柵のようなものの村の入り口に作られていた。

「これだけで平気かな？」

【少し不安だよーねー】

出久とフォウは対策的に不安を感じていたのだが、

「だいじょーうぶーえいー!」

するとリムルがなにやら糸のようなものを出して柵に絡めていく。

【糸のようだね。しかも粘着性やら鋼製やら二種類の糸みたい】

フォウのその知らせに出久はなるほどと、相槌を打った。

とりあえず創造はしないで済みそうだなと感じていた。

あまり力は見せない様にと言われているから今は様子見だねと出久は一步下がって見ていた。

「リムルさん。この糸、どうやってるの?」

「うん。洞窟で蜘蛛から奪ったんだ」

「奪った?」

「うん。俺のスキルでね」

それを聞いて出久は少し微妙な気分になっていた。奪うというとどうしてもオールフォーワンを連想してしまうからだ。

「イズク……このリムルっていうスライム。少し当分の間観察している方がいいと思う。まだ善性なのか悪性なのか判断しづらいから」

『そうだね……悪に染まっているとしたら退治しないとだしね』

リムルとしては別になんてことないのだが、こうして出久達からは少しばかり警戒されるようになっていた。

そもそも奪うと言ったら問答無用のイメージがあるために、出久としてはあまり容認できない感じだろう。

リムルと出久。

二人の思惑はこうして少しズレつつも時間は流れていき、夜になって狼のような遠吠えが響いてきた。

「さて、迎え撃つぞー！」

「」「おー!!」「」

出久、リムル……両名にとってこの世界に来て初めての集団での戦いが幕を開けようとしていた。

NO. 006 牙狼族と事情聴取

夜になって遠吠えとともに牙狼族の狼達がゴブリンの村へと攻めてきた。

イズクが心配だけど、まあ俺よりは強いんだろうな。あれでも。

ちなみにちゃん付けは慣れないのでやめると言われたのでイズクって呼んでいる。

それはそれとして牙狼族が攻めてきたんだから啖呵切った以上、俺がゴブリン達を守らないとな！

「とまれ！」

俺の言葉とともに牙狼族の何匹かは足を止める。

うーん？ よく見ればこいつら何匹か昼間にスキル訓練の時に見た奴らか？

額に星マークがついている奴は特に強そうだな。

とにかく、

「いいか。一度しか言わない。しっかりと聞けよ。このまま引き返すならなにもしない。だからさっさと立ち去るがいい」

「スライムごときが！」

しっかりと忠告はしたんだけどな。

やっぱりそう簡単には聞いてもらえないよな。

その証拠に柵を乗り越えようとする狼達が次々と罠にかかっていた。

うん。急場しのぎとはいえ、対策はばっちりだったようでよかったよ。

「今だ。放て！」

その言葉が合図となって木の上で弓を構えていたゴブリン達が次々と矢を放っていく。

それで何体もやられていくのを見ていて焦っているのだろうボスらしい狼の顔はすぐれない。

「ぐぐぐ……スライムごときが」

「どうだ？ 降参する気になったか？」

「誰が！」

その時だった。

「キヤー!？」

「うわー!？」

「!？」

後方の方からゴブリン達の叫び声が聞こえてきた。

「ツ！ 別動部隊か！ しまった！」

「フフフ……どうだ」

なにやら含み笑いをするボス狼の顔が憎たらしい。

俺なら対処可能だけどゴブリン達だけじゃすぐにやられちゃう！

でも、ボス狼を放っておくことも！

万事休すかと思った瞬間に響いてきたなにかの叫び声。

「にやあああああー……ツツツ!!!」

その叫びとともに別動隊の気配が一瞬にして消え失せたのを感じて、これってもしかしてイズクがやってくれたのかという感想が生まれた。

出久は柵を作っている反対側の方で陣取っていた。
もしかしたら別動隊が来るかもしれないからだ。

【イズクも心配性だね】

「そうだね。でも、やっておくに越したことはないからね」
そんな会話をしている時に、

「牙狼族が攻めてきたぞ!!」

という連絡が聞こえてきた。

それで出久も何人かのゴブリンを引き連れて反対側に移動していた。

「しかし、イズク殿。本当にこちらにもやってくるのでしょうか？」

一人のゴブリンがそう聞いてきた。

それに出久はというと、

「僕の思い過ぎしならいいんだけど、もし奇襲をかけてくるとしたらこつちだと思おうからね」

「はあ……。リムル様のお助けになるのでしたら構いせんが」

「ごめんね。手伝ってもらっちゃって」

「いえ！ これも村を守るためですから強者のいう事には従います！」

「あはは……。強者か。僕って見た目こんなんだけど強く見えるの？」

「あはは。なにをおっしゃいますやら。普通に我らと比べましてもリムル様同様にすごい魔素量をイズク様はお持ちだという事は分かります。それに昼間に傷を治してもらった恩を返さないと我らも示しがつきません」

そう。

いま、出久に着いてきているゴブリン達はリムルとは別に出久に治癒してもらったものばかりなのだ。

「そっか。ありがとね」

「いえ」

そんな会話をしている時であった。

出久達が陣取っている場所の近くでまたしても狼の遠吠えが聞こえてきたのだ。

「やはり奇襲してきたか！ みんな、構えて！」

「はっ！」

それで付いてきたゴブリン達は木の上に登って弓を構える。

そして出久は迫ってきていた狼達に向けて、

「ごめんね……。でも、僕も覚悟しないとイケないから」

そう眩きながらも、

——ユニークスキル『絶対衝撃』発動——

「イズク！ 前より強力になっているから手加減はしてね！」

『うん！』

そして息を思いつきり吸い込んで口に力を溜めていき、そして、

「にやあああああー！ー！ー！ー！ツツツ！！！！」

咆哮は放たれた。

衝撃は波を顕現させながらも奇襲部隊へと直撃していき、

「ガッ!」

「ウガッ!」

狼達はその場で衝撃を受けて動きを強制的に止められてしまう。

「捕えよ!!」

そして叫び終わった出久は新しい動作とともに手を掲げて、衝撃をその場で固定させる。

衝撃の中に閉じ込められた狼達はすべてが耐えられずにやがてその場で気絶する。

「ふう……。なんとか無力化成功だね」

出久は殺さずに済んだことをなんとか喜びつつ、正面の方ではリムルがボス狼を打ち取っていた。

牙狼族のボスは倒すことができたけど、先ほどの叫び声はやっぱりイズクなんだろうなあ。

借りを作っちゃったなあ。

そんな事を思いつつも残りの牙狼族達に叫ぶ。

「聞け！ 牙狼族よ！お前たちのボスは死んだ！ 選ぶがいい。服従か死を!!」

「って、調子に乗って言うてみたはいいけど、俺ってなんか少し悪者調？」

「いやいや、これもゴブリン達の村を守るためだ。」

「そして、俺の叫びにそれでもどうしていいか分からないのだろう、狼達はその場で止まっていた。」

「しかたがない……。」

「それで俺は『捕食者』で死んだボスの牙狼族の体を吸収し、大賢者に解析してもらって擬態を行う。」

「すぐさまに俺の姿は倒したボスよりも大きな牙狼族の姿になっていた。」

「そして脅すようで悪いけど、」

「ククク……仕方がないな。今回だけは見逃してやろう。我に従えぬというならばこの場より立ち去る事を許そう!! さあ、行け!!」

「と、とどめの一撃を放った瞬間であった、
てつきり逃げ出すものと思われたのだが、」

「「「我ら一同、貴方様に従います!!」」」

「と、あっさり俺に従っちゃったよ……。」

「おいおい、いいのかい。そんなに簡単に服従しちゃって。」

「俺はこの時、牙狼族の群れの絆を甘く見ていたんだろうなあと思いきる事になった。」

【告。後方より怒りの波動を感じます】

「へ……?」

「牙狼族の姿のまま後方へと振り向くと、そこにはとてもにこやかな、でもお怒りのイズクの顔が映った。」

「あれ……?もしかして、俺、なんかやっちゃいました……?」

「リムルさん? すこーしあなたのスキルを教えてくださいてもいいかな?」

「ひっ!?!」

「すぐさまスライムの姿に戻ってお辞儀をする俺の姿があった。」

威厳……？ そんなものどつくに捨てたよ……。

出久はその後のリムルのスキルについて聞き出していた。

「ふーん……ユニークスキル『捕食者』ね。それで倒した相手の事を喰らえば能力と姿を手に入るのか」

「はい……」

「まあ、僕としても納得は出来たからいいけど、むやみやたらに喰いまくらないでね？ 必要だと思った時にだけなら使っていいよ」

「そんな殺生な……」

「無駄口叩かない！最後に一つ聞くけど……悪用だけはしないでね？

僕はそれと似たスキルを持つものが過去に悪事を働いて社会を乗っ取ろうとしたのを見たことがあるから」

「それって……」

「僕が言えるのはここまで。それじゃみんなのところに戻ろうか。最後まで責任取るつもりなんでしょ？」

「それは当然だ！」

「それならいいんだ」

それで出久としても心の痞えが取れたような気持ちになった。

「さて、それじゃ僕はこれからどうしようかな」

「一緒に来ないのか……？」

「うん。僕はいまとある人からある依頼をされているんだ。暴風竜ヴェルドラって知ってる？ その竜が消えた原因を調べているんだ」

「……………」

そこでリムルは冷や汗を流して無言になってしまっていた。

そんなリムルの様子に出久は怪訝な表情をしながらも、

「その沈黙……何かを知っているのかな？」

「その……俺の能力はさつき教えたよな？」

「うん。まさか……」

「その、うん……今ヴェルドラは俺の中にいるんだ……」
「ええ？」

それで出久はまだゴブリン達のもとにもどらないでリムルから事情を聴きだしていた。

そして、

「そっか。それじゃ結果的にはリムルさんのそばにいれば大方事態は把握できるんだね」

「おそらく……」

「んー……」

それで出久は心の中でフォウと相談していた。

「イズクう？ どうするー？ このままりムルに着いて行くの？」

『そうだね。静観する意味も込めてとどまるのもありかな？ あとでもっとリムルさんについて話も聞こうと思うし……それになんか同じ転生者の気配がするし』

「そっか、わかった。イズクはリムルの補佐をしていくわけだね」

『結果的にはそうなるね』

と、フォウとの会話を終了させて、

「それじゃ、リムルさんに着いて行こうかな。もともと次の居場所なんて決めてなかったし」

「そうか！ それはありがたいよ！」

素直に喜ぶリムルに毒気を抜かれながらも出久はリムルとともにゴブリン達と牙狼族のもとへと歩いていくのであった。

——こうしてリムルと出久の道が重なった瞬間であった。

NO. 007 フォウの説教

牙狼族との戦いが終わって一応もう時間が時間なので朝になったらまた話し合いをしようというリムルは言い、さっきまで戦っていた相手同士なのにすでに一緒に寝てしまっているゴブリンと牙狼族の光景を見て、

「いいものだね……」

「うん。落ち着いたところで、イズク……。すこし、いいかな？」

『なに？ フォウ』

「私は決してイズクのイエスマンなわけじゃないから言わせてもらおうね。さっき、リムルに言った話……。私にとってすこし傲慢に見えたんだ」

『えっ……？』

先ほどのというのは『むやみやたらに喰いまくらないでね？ 必要だと思った時にだけなら使っていいよ』というリムルに対しての出久の言いつけ。

『ど、どうして……？ だってリムルさんが悪に染まらない様について思ってた言った言葉なんだよ？』

「うん。でもね？ 私にはすくなくならず傲慢に見えちゃったんだ……。イズクは私がイズクに話した過去の事、覚えてる……？」

『忘れるわけないよ。オールフォーワンに捕まって強制的に『生命力を奪う』個性を使わされて苦しんでいた事は……』

「うん、ありがとねイズク。でもね？ 私はオールフォーワンに捕まる前はすくなくとも自分の意思で『生命力を奪う』個性を使用していたんだよ」

『えっ……それって』

「そう……苦しい世の中を生き抜くために、生きるためには妖術や個性を使わないと……私は、ダメだった。」

……群れに入れない、人に飼ってもらってもまた最初の時の様に命

を吸い取って殺してしまうかもしれない、一緒の時間を生きられない……そんなさまざまな感情が縋い交ぜになって、どうしようもない気持ちを発散するために好き勝手に暴れた結果が『猫又の怪』と呼ばれた一因なんだよ……』

『フオウ……』

まるで懺悔でもしているようにフオウは自身の過去の傷を開きながらも、苦しいけどそれでも出久に分かってもらえるために敢えてその話をしていく。

『生きるためっていうのは過剰表現だけど、それは決してはずれじゃない。そしてそれはリムルにも該当するんだよ。私達のもとの世界ではゲームとかでもいいけどスライムってどんな存在だった……？』
『主人公が最初期にやっつと倒せるモンスターだけど、そのうち一撃で倒されてしまうような儂い存在……かな』

『そう。リムルはそんな存在だから生きるのを必死に頑張っているんだよ。襲われればスキルも使うしなんでもする。』

暴風竜ヴェルドラっていう存在と出会わなければもつと苦労したかもしれない』

フオウの言い分はだいたい当たっていた。

大賢者と捕食者いうチートスキルがあるとはいえ、ヴェルドラに会わなければリムルはずつと封印の洞窟の穴倉の中に孤独を味わいながらもいたかもしれない……。

『これはイズクをちよつと侮辱するようにも聞こえちゃうかもしれないけど、私と出会わなければもしかしたらイズクは別の道を行ったかもしれない。オールマイトにも振り向いてもらえなかつたかもしれない……もしくは無個性のまま個性社会に耐えきれずに最悪自殺もしたかもしれない……ありとあらゆる可能性がイズクにはあったんだよ』

『……………』

そんな、諭すかのようなフオウから次々と出てくる言葉に、出久はすこし泣きそうになっていた。

そうだ、色々な奇跡のような出会いがあつていまの自分があるの

に、そんなオリジンを忘れていたなんて……出久はそれで後悔する。
『そして、これはイズクに言う最後の説教だけど、リムルの行いを否定
するという事は私の過去の行いも否定しちゃうの……?』

『そんなこと……!』

『そう……イズクはそれくらいの制約をリムルに押し付けようとして
いるんだよ。』

すべてが正しくて間違っているかなんてわからない。

リムルが悪の道に進むかどうかなんて誰も予想できない。すべ
てはその時の状況によるんだよ。

オールフオーワンももしかしたら『個性を奪う』なんて個性が発現
しなかったらもっと違った形になっていたかもしれない……。

だから、イズクもリムルを補佐しようって決めたんでしょ?』

『うん……』

『だからさ、リムルを縛ってあげないで。きつと自由に動いた方が良
い方に好転すると思うから。イズクが私を救ってくれた時の様に
……』

そこまで言われて出久は心の中で、

「確かに傲慢だったね……何様もいいところだ。トレイニーさんは
言ったじゃないか。この世界は弱肉強食だと。リムルさんもそれで
強くなるうとしてしているんだ。それを他人の僕が妨害しちゃダメだよ
ね)」

そう思ったあとに、

『うん。フオウ、ちよつとリムルさんに謝ってくる』

『うん。そうした方がいいね。それでこそ私が大好きな人の事を思い
やれるイズクだよ』

『……フオウ、ありがとう』

『うん♪』

それで近くで寝ているのか分からないが動いていないリムルに出
久は近寄って行って、

「リムルさん。少しいいかな?」

「お?どうしたんだ、イズク。改まって?」

「うん。ちよつと謝ろうと思つて」

「謝る？ なにを……？」

「うん。僕はさつき君の事を縛ろうとした。スキルをむやみに乱用しないのでつて言つて……」

「……………」

リムルは真剣な雰囲気だと感じて黙つて聞いてくれている。

それだけで出久はありがたい気持ちになつて、先ほどのフォウの話等をなぞるように話して謝罪をリムルにした。

俺は少し感動していた。

さつきは怒つてたのに、今はすぐに謝罪をしてきて、そして「スキルは自由に使つていいよ。僕が口出しできる立場じゃないからね」と自由を許してくれた。

それだけでも俺はちよつと心休まる気分になつていた。

「でも。なんかイズクつて年上な感じがするよな。ちよつと活発だけど冷静だし、牙狼族の奇襲も読んでいたみたいだし」

「まあ。生前の勘つて奴かな」

「生前？ つてことはやっぱリイズクも！」

「ということはやっぱリムルさんも？」

「転生者!!」

思わず嬉しくなる。

こんなにも早く同郷のものとか会う事ができるなんて！

「そつか。名前とかでそんな感じはしていたんだ。まるつきり日本人の名前だもんな。『イズク』つて」

「そうだね。でも、それじゃリムルさんつて生前はどんな感じだったの？ どんな個性を持っていたの？」

「個性……？ 個性つて性格の事か？」

「えっ?」

うん? なんだろう。イズクとの会話で微妙な違いがあるみたいだ。

それで俺はためしにイズクの世界について聞いてみた。

すると出てきたのはとんでもない内容だった。

なんと、世界総人口の8割がなにかしらの『個性』というものを宿してヒーロー、あるいはヴィランとして活動していたなんて!

「それってなんてアメコミ!? いや少年ジャ○プ系かな!」

なんか久々にオタクな気分が蘇ってきたぞ!

それからいろいろと出久の周辺事情について聞いていくと、結構重たい話が出てきた。

聞けば聞くほどに可哀そうになってくる感じだ。

でも、それでも最後は生命力を全部消化して天寿を全うしたあとに、俺みたいに世界の声でこの世界に転生してきたんだとか。

「刺されて死んだ俺とは大違いな差が出来たな。だからイズクはそんなに強いんだな」

「僕はまだまだ強くないよ。たまたま運のめぐり合わせでフォウと出会って、色々な人に助けられながらできた行動だったから。」

それにみんなからももらった個性がなかったらもつと弱かったかもしれない」

そうなんだよな!。

その貰った個性達が統廃合された結果が今のイズクのスキルなわけで、一つ一つどんなスキルか聞いていくとどれもこれも俺より強力なもんばつかじゃん……と落ち込む。

「すごいんだな!。だから大賢者も言っているけど聖なる気配も出せているのか」

「あんまり僕は納得していませんけどね」

そんなことないと思うけどな!。

万単位で人の命を生涯救い続けてきたイズクは間違いなく聖人に近いものがあると思うし……。

謙遜しちやうところも性格故って感じかな。

よし！

「それじゃ改めて言うけど俺の仲間になつてくれないか？ イズクがいたらきつと楽しくなりそうだって俺の勘が告げているんだ」

「こんな僕でよかったら……よろしく、リムルさん」

「おう！ よろしくなイズク！」

そこまで言つて俺とイズクはこうして本当の意味で仲間になれたのかもしれないと感じた瞬間だった。

でも、そっか……。

そういえば、まだイズクつて名前は这个世界では正式な名前じゃないんだ……。

明日やろうと思つていた名付けをイズクにも正式に付けてあげるのもいいかもな。

そう思いつつ、夜は更けていくのだった。

NO. 008 名付けと進化

リムルと再度仲間になるという話で盛り上がってその翌朝の事であった。

リムルはゴブリンと牙狼族を集めて見回していた。

出久もリムルの隣に立ちながらも、

「結構野性味ある所帯だよな」

「そうだな。指示を出して村を整備していきたいんだけどな」

「僕の仙術使う……?」

「いや、イズクに頼りきりだところいらの為になんないだろ? だからいざって時に力を貸してくれ」

「わかったよ」

それでリムルは村長にとあることを聞いた。

「そういえば村長。お前に名前なんてあるのか?」

「いえ、魔物は普通名前などもちません。それに名前などなくとも種族間で意思の疎通は可能ですので今までそんなに苦労はありませんでした」

「そうなのか……でも、俺とイズクが呼ぶときに苦労するしな。そうだ! お前たち全員に名前を付けようと思うがどうだろうか?」

リムルの提案に一気に場はざわつく。

それは出久も同じくで驚いていた。

「その……リムルさん? 名付けはとても大変な行為だって知ってます?」

「そうなのか? まあどうにかなるだろう」

「大丈夫かなあ……?」

出久は一途の不安を感じていたために、

『ねえ、フオウ。リムルさんが魔素が切れそうになったら与えるのはどうだろうか?』

【いいと思うよ。その分すぐに回復してさらに倍増するしね】

出久はそういう方針をすぐに立てた。

なんか名付けだけで大変な騒ぎになってんな。

イズクも言っていたけど、そんなに大変な行為なのか？ 名付け
て……。

まあなんとかなるだろ。その時はその時だ。

「それじゃまずは村長から行こうか」

「おお……！」

村長がすごい感動した顔になっている。

そこまでの事なのか……。

「村長とその息子は村一番の戦士の『リグル』の身内だって言っていたよな？」

「は、はい……」

「では、父親の村長はリグルから名前を取って『リグル・ド』を名乗れ
！」

「おお……っ！ ありがとうございます、リムル様！」

「そしてそのリグルの弟は兄の名を継いで『リグル』を名乗れ！」

「はい！」

それから俺は次々とゴ布林達に名前を付けていった。

それを心配そうに見ているイズクの視線が気になるけど、まあまだ

大丈夫大丈夫……。

嫌な予感なんて最後までやってから後悔すればいいし。

「お前は『ゴブタ』！」

それから順に『ゴブチ』『ゴブツ』『ゴブテ』『ゴブト』と名付けてい
くんだけど、大賢者は何も言っていないし、なにがそんなに心配なん
だろうか？

村長改めリグルドもそれで、

「リムル様、大丈夫なのですか……？」

「ん？」

「リムル様の魔力が強大なのはご存知ですが、それでもそんなに一度に大勢に名前を与えるなど……」

「まあ、大丈夫だろう？ いまのところなんともないし」

「さすがリムル様だ……」

いちいち反応がすごいな……。

それからオスのゴブリン達は終わったので次はメスのゴブリン達に名前を付けていく。

それも難なく終了して、お次は牙狼族の番となった。

まず俺が倒したボスの息子である額に星型の痣がある狼。

なんかこいつには特別な名前を付けたいよな！

俺のファミリーネームを加えるか！

テンペスト？ 嵐……そして牙でランガ……？

安直だけどいいと思う。

そうして名付けをしようとした瞬間だった。

「リムルさん。タイム！」

「ん？ どうしたイズク？」

イズクが突然タイムと言ったので、俺は一旦名付けを停止させた。

なにやらイズクの目が光っているけど、妖術でなにかの魔眼でも開発したのか？

羨ましい能力だよな。ホントに。

「僕が目でリムルさんの魔素量を見た感じ、その子に名前を付けた瞬間に魔素量が底をつく感じだよ？」

「なにつ?! そうなのか!?!」

おい、大賢者。そこらへんどうなのさ？

そう聞いてみると今まで沈黙を保っていた大賢者が、

【告。その通りです。もう少してスリープモードに入るかもしれません】

おおい!? そういうのは早く言ってくれよ!

あつぶねえ!!

肝心な時に話をしてこないな!

そんじやどうするか。

俺は考えを巡らそうとした時だった。

またしてもイズクがある提案をしてきた。

「それで僕から提案があるんだけど、いいかな？」

「なんだ？」

「僕がリムルさんに魔素を分け与えるのはどうかな？ 使用した魔素分全快するくらいに」

「イズク様！ それはなりません！ それはあまりにも自殺行為です！」

すぐにリグルドが止めに入るけど、俺はそこまで心配はしていないんだよなー。

だって、イズクって魔素を使用したら使用分倍に魔素量が膨れ上がるスキル『無限成長』を持つてるし。

いやー、チートスキルだよなー。

「リグルドさん。大丈夫です。それじゃリムルさん、いつくよ？」

「おう！ どんとこい！」

イズクが魔素の光を俺に注ぎ込んでくるのを感じて、って、おおおおおお！

なんだ!?!すごい量の魔力が流れてくんだけど!!

【告。魔素量が全快しました。魔力総量もアップしました】

はやっ!?!

「はあ、はあ……こんな感じでどうかな……?」

少し息を切らせているイズクだけどすぐに回復するだろうし、

「ありがとな、イズク」

それで俺はボスの息子にもう一回振り返って、

「それじゃさっそくだけど、お前の名は嵐の牙で『ランガ』だ！」

「わおーん!!」

これでランガも終了した。

他の牙狼族にもつけてやりたいけど、先に付けておきたいことがある。

それで俺はイズクの方へと振り向いて話をする。

イズクはちよつとわかっていないのか首を傾げている。
くっ！ 相変わらずあざとい……ッ！

俺はなんとか邪念を振り払いつつ、

「イズク。改めて仲間の証としてお前にも名付けをしようと思うんだけど、いいかな？」

「え？ 僕にも？ でも、いいの……？」

「いいっていいって！ さつき魔力を回復させてくれたお礼も兼ねて受け取ってくれよ。今ならまだ何人でも名前を付けられそうだし」

「うーん……まあ、いいのかな？」

イズクも納得してくれたようでよかった。

それじゃいくとしますか。

「お前の名前は正式に『イズク』とする」

「うん、ありがとう。リムルさん」

どうだ？と聞こうとした瞬間にすごい虚脱感に襲われた。

あれ……？

さつき魔力全回復した筈だよなー？

【告。スリープモードに移行します】

マツジでえ!?

もしかしてイズクがさつき全回復してランガに使った分とは別に残っていた魔素を根こそぎ持って行つたつて事か!?

魔力感知も切れたし、できることはなんもないなあ……。

回復するのを待つしかないか。

やっぱり俺より強い魔物だからかな？

聖獣は伊達ではないって事か。

ベチャアツと溶けてしまったりリムルを見つつ、出久は自身の身体に変化が起きるのを実感していた。

それは他の者も同様で進化の光でもあるのか身体が光っている。それでも、リムルの事が心配なのか「リムル様！」と連呼されている。

出久は仕方がないなと思いつつも、

「多分大丈夫だよ。少しすればリムルさんは回復すると思うから。それよりもみなさんも進化したら体の成長とかもあるでしょうし、まずは各自で服の手配をお願いします」

「わかりました！ イズク様！」

「イズク様が大丈夫だと言うのならリムル様もきつとすぐに回復なされるはず！」

「それでは宴の準備でもしましょうか！」

と、盛り上がりを見せていた。

すると、そこに牙狼族のボスの息子改めランガが出久に近寄ってきた。

ランガも進化の途中なのか身体がどんどんと大きくなっていくのを感じる出久。

「イズク殿。少しご相談があるのですが……」

「なに？」

「いえ、我が主から名を頂いたと同時に、なにやらイズク殿との繋がりも感じられるのです。他の同胞などはそんな感じはしないというのですが、どういう事でしょうか……？」

ランガのその言葉を聞いて出久はすこし考える仕草をしつつ、フォウに尋ねてみた。

フォウはそれでなにかわかったのか、

「たぶんだけど、さつきリムルにイズクの魔力を渡したばかりで、リムルにイズクの方が込められている中ですぐにそれをランガに使用したからじゃないかな？」

『それが正解、かな？』

それでフォウとの会話の内容をランガに教えると、

「そのようでしたか！ 分かりました！ ではイズク殿も我が主という事になるのですね！」

「え？　なんか突飛な感想だね」

「それでもございません！　なにせ、おそらくですがイズク殿のスキルもいくつか使えるようになったかもしれないと我が勘が告げているのです」

「……………たとえば？」

「なにやら氷と炎と雷の力が使えるようになったみたいです！」

「なるほど……………それじゃランガだけ特別な固体になったんだね」

「はっ！　大変ありがたございます！　では我は他の同胞の統率を行いますので、ではまた！」

そう言つてランガは群れのもとへと走つていった。

【とりあえず、イズクも進化したようだし使えるようになったスキルの確認でもしていようか】

『そうだね。……………なんか身体的成長はそんなになかったのが悲しいけどね』

【私の計算だと5cmくらい背が上がったよ？　胸も少し膨らんだし】

『そういう情報は今はいいです……………』

【あと、種族が猫人族から聖猫人族に進化したみたい。聖なる力の効果が上がったのはいいことだね】

『それは……………どうなんだろう……………？』

とにもかくにも出久はリムルが起きるまで待つことにしたのであった。

リムルが起きたらいよいよ村総出での宴の始まりだから出久も手伝う事にしたのであった。

NO. 009 リムルの目覚めと進捗

リムルがスリープモードになってから三日経過した。

その間にゴ布林達と牙狼族達は見事に進化していた。

そして進化の際に『世界の言葉』を聞いた時に出久はというと、

「なるほど……世界の声だったんだね。この声」

「そうみたいだね、イズク」

「はい。その様子ですとイズク様は初めて聞いたわけではないのですね？」

「はい。……………それよりリグルドさんもよぼよぼだったのに、随分とまあ…………」

リグルドはまるでオールマイトか！と言いたいくらいに筋骨隆々な姿に進化していた。

「そういうイズク様はそんなに進化しなかった御様子ですね」

そうなのである。

少し背が高くはなったが、それでも出久の身長は小学生高学年くらいの身長のままである。

昨日まで同じくらいの身長だったゴ布林達とは差が出来てしまった。

「まあ、種族が猫人族から聖猫人族には進化してみたみたいんだけどね」

「そのようですね。イズク様の聖なる気配が昨日より確実に増えていますからな。それに、とても可愛らしいですぞ」

「あはは……。ありがと」

出久はもう少し諦め気味になっていた。

いつその事、完全擬態で本当に成長してしまおうかとも思ったほどには。

そんな事を感じつつ、リムルが配置されていた小屋の中に入っていきくとそこではハルナが面倒を見ていた。

「ハルナさん。リムルさんの様子はどう？」

「あ、イズク様！ はい、そろそろ起きる頃だと思うのですが……」

「そうみたいだね。でも、なんでみんなは僕の事をリムルさんと一緒

に様付けするの？なんかむず痒いってどうか……」

そう出久がハルナに問うと、ハルナは当然と言わんばかりに、

「イズク様はリムル様と魔力のやり取りをして同格の存在となりました。ですからイズク様も私達のもう一人の主なのです」

「魔力のやり取り……」

【まさか、繋がっちゃったかな……？】

それで思い出すのはランガに名付けをする前にリムルに魔素を送り込んだ時である。

それで世界の声はリムルと出久は同格の存在だとゴブリンや牙狼族の一同に教えたらしい。

「そんな事になっていたんだね……」

「はい。ですからイズク様はリムル様と同等の存在なのです。それに私個人としましてもイズク様は容姿がとても可愛らしいので愛らしく感じています」

「そ、そう……」

出久はハルナの嘘偽りない言葉に恥ずかしくなって顔を赤くしながらも猫耳はふにやつと垂れて尻尾は嬉しいのかぶんぶん揺れていて、それでハルナの琴線に触れたのか、

「ああ……イズク様。本当に可愛らしい」

「は、ハルナさん……？」

【なんか様子がおかしくなってるね。新しいスキルのせいかな？】

なにか、危険な雰囲気になってない？と思う出久とフオウだったが、その時にタイミングよくリムルが目を覚まして、

「俺、復活!!」

「リムル様!」

「リムルさん！　なんかいろいろとちようどよかった!」

リムルの目覚めに出久は助かったという気持ちになっていた。

そんなリムルはというと、

なんか、目を覚ましたはいいんだけど……すっこし成長しているとはいえイズクの事はなんとか確認できた。

でも、その隣にいる可愛らしい女性は誰だろう……？

「リムル様。お目ざめしたのですね。今リグルド様をお呼びしますね」

そんな事を言つて謎の女性は小屋の外へと出ていった。

「そのさ？ イズク、いまの女性って誰……？」

「困惑するのはわかるよ。でも、あの子はハルナさんだよ」

「ハルナだって!？」

イズクの言葉に少し信じられないといった感じの俺がその場にいましたとき。

それでイズクが短く要約して教えてくれた。

名付けで進化したのだと。

だからかあ……。名付けは大変な行為ってそういう事だったんだな。

今度から気を付けないとな。

またスリープモードになるのは勘弁だから。

そしてハルナが出て行って少しして、

「リムル様！ お目覚めになりましたか！」

そんな豪快な叫びとともにリグルドが、リグ、ルド……。？なんだこの筋骨隆々の魔人は!？」

名付ける前はよぼよぼのじいさんだったよね!？」

「これも進化って事で受け止めてね。リムルさん」

「お、おう……」

どこか達観しているようなイズクの言葉に俺もなんとか現実を受け止める。

さらに次の瞬間には小屋が崩れてとつてもでつかい狼が中に入ってきた。

「我が主！　ご快復心よりおめでとうございます！」

「お前……もしかして、ランガか？」

「はっ！」

なんかボスより大きくなっていない！？

それに後からやってきた他の狼達も毛並みが変わって進化しているのを伺える。

あれ？　ランガにしか名前つけてないよね？

それでのちほどにランガに理由を聞くと、牙狼族は『全にして個』らしく、ランガが進化したと同時に名前を与えていないけど他の奴らも進化したらしいと……。

それで種族も『嵐牙狼族<テンペストウルフ>』に進化したらしい。名付けっすげー……。

しかも、

「そして、我がもう一人の主であるイズク様より力も授かりました。リムル様の嵐に加え、炎、氷、雷の属性も宿しました！」

「なんとー！」

「そういう事らしいんだ」

それで理由を聞いてみると、あの時ランガの名付けの時にイズクの魔力も拝借したから、そのはずみで俺とイズクのなにかしらの回路が繋がったらしく下手したら俺はイズクの魔力も今後何度か拝借できるとなったらしい。

【告。 個体名：イズクとの接続を確認。 同格の存在となりました】
なるほどなるほど……。

もしかして、俺もイズクの力を使えたり？ いや、そんなうまい話はさすがにないか。

「それと僕もなんか猫人族から聖猫人族に進化したらしいんだ」

「ほうほう？　あまり胸は成長していないような……あいたっ!？」

「さすがにセクハラだよ……?？」

「すみません……」

素直に謝っておいたが、そうか。

だから聖なる気配がさらに増してんだな。

「それになんかユニークスキル『信仰の加護』なんてものまでついちゃったんだ」

「それは!？」

「どうも、生前からの功績がついにスキルとして形になってしまったらしい。」

「なんかイズクも俺同様にゴブリン達に信仰されてしまっているらしくて、外界に対して聖なる守護の力を信仰する者たちに授けるスキルらしくて、信仰している限りそれだけで聖なる守りが約束されるとかなんとか……。」

「世界の声ってなんかイズクに対して轟然してんじやね?と勘ぐってしまっただ。」

「ま、いつか。なんとなくだけどイズクだからで納得できちゃうんだよな」

「そうですね」

「その通りですね。我が主!」

「なんか、恥ずかしくなってくるね……」

「それで顔を赤くして俯くイズクはそれはなんというかずるいほどに可愛い。」

「もしかして魅了のスキルとかも付属されてるんじゃないやね?と思う。」

「俺も少し危うくなるからな。」

「魅了されない様に気を付けないとな。」

「それから宴が開かれて、リムルが音頭を取る事になっていたの、

「えー……それではみんなの進化と戦が無事に終わったのを祝って——かんぱ——……い?」

「リムルが過去の様にしてしまっていたが、当然リグルド達は理解ができないためにハテナ顔になっていた。」

「リムル様『かんぱい』とはいったい……?」

「あ、ああ。知らなかったか」

「まあそれはそうだと思うけどね……」

それからリムルは乾杯について詳しく説明していき、なんとか理解できたのかりグルド達も「かんぱい！」とコップを掲げて叫んでいた。

ちなみに、なぜかこの場に似合わない少し高級そうなコップだったためにリムルはすぐに出久の方へと向いた。

「あはは。少し創造しちゃいました」

「なるほど……」

創造だなんてなんでもありだな、とリムルは思った。

そんな事を思っていないながらも宴も終わって、これからの方針を考えるリムルであった。

「(やっぱり家とかもぼろぼろだよな。装備も刃こぼれだらけだし……村の発展のためには知識を持つものがいたほうがいいよな。課題は山積みだな)」

それから翌日。

リムルは出久と話し合ってみんなを広場に集めていた。

わざとらしくリムルはちよび髭を付けて、いまだに騒いでいるみんなが静かになるまで黙っていた。

そしてやつと静かになったと思ったら、

「えー……いまみんなが静かになるまで5分かかりました」

「ぶふっ……」

出久はそれで恩師であった相澤消太の事を思い出していた。

だけどやっぱりみんなはそんなリムルのジョークも分からずにまたしても首を傾げていた。

リムルはネタが通じないと実感すると、すぐにちよび髭を外して、

「えー、見ての通り俺達は大所帯になった。それでこれからトラブルを起こさない様にルールを決めようと思う」

その1：仲間内で争わない

その2：進化して強くなったかと言って他種族を見下さない

その3：人間を襲わない

リムルが提示したこの三つの条件に、しかしそこで出久は「待った」をかけた。

「リムルさん。もう一ついいかな？」

「聞こうか」

「その4に、『もし人間に襲われそうになったら抵抗も止む無し』を追加してもいいかな」

「ふむ。いいな！ それも採用！」

そしてこの四つのルールが提示された。

それで早速リグルが「なぜ人間を襲ってはいけないのですか？」とリムルに聞く。

それでリグルドが鋭い顔になっていたがなんとかあやしつつ、

「それは俺が人間が好きだからだ！」

「なるほど。理解しました！」

「ほんとにー？」

「はい！ それでルール4も生きてくるのですよね。もし人間が襲ってきたら抵抗して逃げるか無力化するという感じでしょうか？」

「その通りだ。頭いいな、リグル」

「ありがとうございます！」

「確かに魔物は強いけどな。人間は集団で生活している。彼らだつて襲われたら抵抗もする。そんなのどっちにしても損しかないだろ？ だからなるべく手出しはせずに仲良くしていくのもありだと思うんだ」

そうリムルが説明すると、みんなは納得したのか「わかりましたー！」と声を上げていた。

「それと、リグルド」

「はっ！ なんてでしょうか、リムル様？」

「君をゴブリン・ロードに任命する。村をうまく治めてくれ」

瞬間、リグルドに雷でも落ちたかのように固まってしまい、次の瞬間には、

「ははあ！身命を賭してその役目、果たさせていただきます！」

「うむ。頼む」

「ねえ、リムルさん。それって体のいい丸投げじゃ……」

「それじゃみんな！ 頼むね」

出久の質問にリムルはあえて反応せずに言い切っていた。

「後が怖いよ……？」

「うっす！」

それから村づくりを始めたのはいいのだが、やはり技術がないために張りぼて小屋くらいしかできないために、どこかで技術者を雇わなるとな思っていたところに、リグルドが何度か取引をしたことがある者がいると話したので、聞いてみるとなんとその者たちとはファンタジー世界ではそれは有名な種族。

そう……ドワーフ族という単語が出たために、

「それじゃ俺が直接交渉に行ってみるよ。イズクもいくか？」

「そうだね。僕もドワーフには興味あるし」

「わかった。リグルド、物々交換するための準備を頼む」

「はっ！昼までに用意いたします！」

それでリムルと出久はドワーフ族が住むというドワルゴンという国に向かう事になったのであった。

NO. 010 ドワルゴンに向かう道中

リムルがランガの上に乗って、リグルやゴブタなど計五組の人数含めてドワーフ王国に出発した。

それでイズクはいまどうしているのかって？

なんと嵐牙狼族達と同スピードの走りを見せながら並走していた。

《おーい？ イズクー。そんなペースで大丈夫かー？ スタミナ切れとか起こしていないかー？》

と、リムルが牙狼族のボスを捕食したことにより覚えたスキル『思念伝達』を使ってイズクに話しかけてくる。

そんなリムルの心配な声に対してイズクはというと、

《大丈夫だよ。なんか前世からの努力とかは引き継がれているみたいでこのくらいの走りなら平気みたい。それに進化してから活力がみなぎっているっていうか……》

《あー……ランガ達もそんな事言ってたな》

《うん。それに生前は山岳救助チームに入って人助けとかもよくやってたからこのくらいの森の移動ならまあそんなに苦じゃないかな？》
《なんでもやってたんだな……》

それでイズクは思い出す。

ワイルドワイルドプッシューキャッツのもとで本格的に訓練をさせてもらって、夏の炎天下、冬の雪山、湿地帯のぬまぬま、岩山のごてごて……およそ普通の人が訓練するにはふさわしくない場所です様な訓練をしていたことを……。

跳んで跳ねて転がって……、個性『許容量キヤパ限界を無くす』と『オートヒール』がなかったらおそろく死に絶えていたのではないかと思う程の過酷なもの。

《無限成長でスタミナも体力も自力が上がっていくからお得ってわけか》

《そうだね》

《いいなー……羨ましい。俺もそういうの欲しいよ》

《欲しいからって僕を捕食しないようにね？》

《……心にとどめておきます……》

なにやらリムルの反応が少し遅れたことに対してイズクはすこしばかり恐怖を感じていた。

まさかね……という疑問がぬぐえないが、リムルもそこまで愚かではないだろうとイズクも納得していた。

「イズクー。私がリムルが変な動きをしない様に見張ってるね。そんなことはないと思うけど捕食されるのはヤダもんね」

『そうだね』

フオウともそんな会話をしながらも走るスピードは緩めないイズクであった。

そんな時にリムルがある事を聞いてくる。

《そういえばさ。今俺って結構暇を持って余しているからイズクにいくつか移動しながらも聞いておきたかったんだけど……》

《なにー？》

《さらっただけど、イズクの過去は聞いたじゃん？ でも、なんか気になるっていうか、なんだっけ？ 『猫又の怪』だっけ？ なんかそれ聞き覚えがあるんだよな》

《え？ そうなの……？》

リムルの思わずの言葉にイズクは一瞬スピードが落ちるがすぐさまに元に戻る。

それでリムルに詳しく聞いていくと、

《なんか俺が死ぬ前にもそんな都市伝説がたまにテレビの特番とかでやってたことがあったんだよ……》

《それって……》

それでイズクは目を見張りながらもとある考えをしていた。

それから考えうる可能性としては、

【まさかリムルの世界はイズク達の世界の過去なのかな……？】

フオウのその予測にたいして、イズクが出した考えは『わからない』であった。

《俺はもうこうして転生してきちまったから元の世界に関してはどうこう言えないんだけどさ。多分だけど俺の世界とイズクの世界は繋がってるんじゃないかなって……》

それを確かめるすべはいまのところ、他の異世界人と出会うくらいしかないと思うんだけど、多分だけどイズクは時間軸事巻き戻しでこの世界に転生してきたんじゃないかって思うんだ》

リムルの考えは案外的外れでもないかもしれない。

イズクとフォウは思わずその考えに賛同するかもしれないくらい説得力があつた。

《フォウが『猫又の怪』で活躍していたのは超常が起きる前からだからあり得ない話じゃないのかな……？ でも、だとするとリムルさんの世界はいずれ超常によって生活が激変する未来が約束されているのか、はたまた超常は起きない並行世界という可能性も捨てきれないね》

《そうだな。まあ俺もイズクももうこうして前の世界とはもう関わりはないんだから本当にただの暇つぶしな考えだな》

《そうだね……いまはこれからをどうするか考えていけないといけなしいしね》

《だな。そう考えると俺達って結構運がいいのかもしれないな》

《というところ……？》

《だってさ。ヴェルドラでさえ俺のような転生をしたものは見たことがないって言っていたのに、すぐにイズクに出会えたんだからさ》

リムルのその多少気持ちが弾んでいるかのような言葉に、イズクも納得できたのか、

《この出会いにもなにかの縁があるのかもね。大事にしないとね》

《おう。そうだな》

そんな話をしていたら、フォウがイズクにとある話をしてきた。

「イズクー。なんかまた無意識なんだろうけど妖術でスキル『思念伝達』とスキル『分割思考』を覚えたみたいだよ。きつとリムルと会話をしながらも意識を割いて走っていたから最適化するかのようによいズクが願ったんだね」

《えっ……なんか軽い感じに言っているけど相当なものじゃない？》
「イズクも自分で言っていたじゃない？ その場その場で妖術は増やしているこうって……。なにごと自分の発言には自覚を持たないかね♪」

どこか楽しそうなフォウの言葉にイズクは無意識とはいえそんなにポンポンとスキルを作ってよいものかと悩んでいた。

そして会話が途切れたのを不思議がってカリムルがまた会話をし
てきて《どうした……？》って聞いてきたのでイズクは苦笑いを浮か
べながらもさきほどのフォウが教えてくれた内容をリムルに話すと、
《やっぱり羨ましい……》とこぼしていたとか。

なんかイズクって無意識とはいえ結構自分を最適化していくのに
余念が尽きない性格なのかもしれないな。

無意識に『妖術』を使って、新たに『思念伝達』に『分割思考』と
か覚えて、なんていうか本当にその場その場で増やしているよなって
感じ。

生前の功績とかでここまで融通が効いてくると羨ましいを通り越
して呆れてしまうかもしれない。

『妖術』と『無限成長』がいい具合に連動していて成長し続けるって
うのは、いったいどこまで成長するのか考えただけですわ恐ろしい
……。

だつてさ？ 『妖術』を無意識に使ったって事はその分の新たにスキ
ルを覚えるための魔素も使用したわけだからさらに魔素量が増えた
わけだろ？

大賢者。そこんところどうなってる？ イズクの魔素量はやっぱり増
えてんの？

【解。 个体名：イズクの魔素量は使用分の魔素量のぶんが倍に膨れ上がりもとの魔素量に足されました】

やっぱなあ……。

イズクは確実に総合的に強くなっていつている。

生前の経験もあるから戦闘経験値に関しても事欠かさないだろうし、ホントどうなってるの？ この娘……。

これであとは身体的成長も全盛期になれば向かうところ敵なしなんじゃね？

イズクと会話する前にリグルと話していた魔王とやらとも張り合えるくらいになったらすごいよなあ……。

そんな事を思っていた時であった。

「我が主イズク！ そろそろ夜も更けてまいりました。ここいらで休憩と野営の準備をいたしましょう」

「わかったー！」

ランガがそう言ってイズクの事を止めていた。

うん。休憩もいいよね。

それに明日はイズクをランガに乗せて休ませるか。別に急激な成長速度が怖いって訳ではないぞ？うん。

その夜の事であった。

ドワーフ王国に行ったことがあるというゴブタにどういう国なのか聞いてみたら、

「はい…ええつとですね。ドワーフ王国は正式名としましては『武装国家ドワルゴン』っていうつす」

なんでも天然の大洞窟を改造した美のある都らしい。

それに聞くとドワーフ以外にも人間……そしてなんとエルフとかもいるって話じゃないか！

俄然やる気が出てきた。

でも、そんな俺の考えが見透かされていたのかイズクが、

「リムルさん。顔がにやけている気がするよ……？スライム顔だからよくわからないけど……」

「そ、そんなことないよー？それより俺達魔物がそんなところに入っ

ても大丈夫なのか？」

「そこは心配いりません。ドワルゴンは中立の自由貿易国家……です
ので王国内での争いは王の名に於いて禁じられています」

リグルの会話を聞きながらもエルフの事を考えていたが、次の言葉
である『噂ではこの千年、ドワーフ王率いる軍は不敗を誇っている』と
いう内容に目が飛び出そうになった。

それはイズクも同様のようで、

「そんなに不敗を保っているのはすごいね。相当の実力者だらけなん
だね」

「おそらくですが……それだけの権力も持ち合わせていますので陥落
は絶対とは言いませんがしないでしよう」

「だろうね」

それでうんうんと頷いているイズク。

多分だけほどの程度の戦力があるのか考えているのかなって俺は
感じた。

イズクって治癒という能力があるけど、その反面能力的に前線部隊
タイプだもんなー。

「それじゃとにかく、こちらから手を出さなければ大丈夫かな？」

「ええ。トラブルなんて起きませんよ」

と、リグルが言い切っているよそに、ゴブタが小さい声で「前に行つ
た時は門の前で絡まれた」というのは聞き逃さなかったぞ。

「ゴブタ君。それはフラグだよ」

「フラグ……？ それってなんすか？ イズク様？」

「あつ……えっと、あはは。聞かなかったことになっておいて」

イズクは正直だなあ。

まあ俺も脳内でツツコミは入れていたけど。

このフラグが回収されない事を切に祈りたいものだね……。

まあ、こういう時に限って効果は発揮するというのがフラグだから
今のうちに諦めておくのもいいかもな。

そして一同はもう一走りして丸三日経過してようやく武装国家ド
ワルゴンの洞窟がある山脈へと到着したのであった。

NO. 011 外伝・ヴェルドラの観察日記1

我は暴風竜ヴェルドラ。

世界に四種しかいない竜の一種である。

色々と巡り合わせがあり、いまはこうしてリムルと友達になり、盟友となっておる。

リムルが我が封印されていた洞窟を出た後にゴブリン達の願いに応えて「守ってやる！」と答えたところまでは良かったともいうな。

そこにふらりとやってきた獣人がきてから我の勘が何やら悲鳴をあげだしおった。

ただの獣人になにを怯える事がある？と我の本意がそう語っておったが、

なんだ？この小娘から出ておる聖なる気配は!?

まるであの時の勇者を彷彿とさせるほどのものではないか！

リムルはリムルでこの小娘の気配にあんまり気づいていないのか呑気に、

「猫娘!? かあいいなー……」

とかほざいておる。

誰か我のこの気持ちに代弁してくれないであろうか。

なんとというか……この小娘、魔素量がかなりあると思うのだが……。

いまのリムルを上回っているのは確かだな。

我を取り込んで魔素量がえげつなくなっているはずのリムルにせまるものがあるというのはどんだけであろうか？

それほどに我はこの小娘の事を警戒している。

はたして敵か？それとも味方か？

おそらくだが今のままであったらリムルは負けてしまうかもしれないと、我にしてもありえない感想だが浮かんできよる。

それで我は一人警戒していたのだが、

リムルはやはり大胆な性格なのだろう、
「俺、スライムのリムル。悪いスライムじゃないよ？」

と、普通に自己紹介をしておった。
するとその小娘はすぐに笑みを浮かべていた。

ふむ？ どうやらリムルの反応がよかったのか、小娘とはすぐに打ち解けたようだな。

リムルもそれですぐに仲間になってほしそうな感情が窺い知れるが、我としてはまだ警戒態勢をしようとするか。

なにもできないのが口惜しい。

そしてその小娘は言った。

『まだこの世界では名前を持っていない』

『いまはイズクと名乗ってる』

と。

意味合いとしては正しいが、自分で名を名乗るというのはこの世界の魔物にしては珍しいのではないか？

正式な名ではないらしいが、それはすでに名付けの範囲だと思うのだが。

まあ、名乗っているだけならまだ力は上がっていないだろうよ。

それでもだ。

正式な名はないというのに、我が見ただけですでにこれほどの力を内包しているというのはいすごいことであるな。

それからリムルとイズクはゴブリン達に村を案内されていき、そこで怪我人だけが寝かされているテントに案内されて、リムルは事前
に洞窟で作っていたのか回復薬を使って一匹のゴブリンを完全回復
させていた。

すごい効果であるな。

おそらくこれはハイポーションではなく、フルポーションに近いものではないか？

さすがリムルだな。

しかし、次の瞬間にはまたこの小娘イズクに驚かされた。
リムルの薬と同等の治癒スキルで幾人もの怪我人の傷を瞬く間に
塞ぎ追った。

それだけではない。

私の勘違いでなければ治癒のスキルを使うために使用したであろう
魔素が減るところか逆に増えておる。

これはどういうことであるか？

特殊なスキルを持っているという事なのか？

私の探求心が妙に騒ぎおる。

この小娘のスキルの事を知りたいと……。

それからリムルが先導して村の家に使われていた木材で柵を作っ
て粘性や鋼製の糸などを使い、迎撃態勢を整えていく光景を見せられ
て、なるほど……こういう風にしてリムルだけが戦わずにゴブリン達
にも戦わせるという事か。

リムルならおそらくは本気を出せばただの狼共などすぐに殲滅で
きょうものぞ。

リムルは策士でもあるのだな。

しかし、いざ狼共が攻めてきたときには最初はうまくいつていた
が、少ししてゴブリン共の悲鳴が聞こえてきてリムルは焦り出す。

どうやら別働隊がいたようであるな。

だが、それもあの小娘のおかげなのかなにやらひと際大きい叫び声
が聞こえてくるとあちらの方で動いていた気配が一斉に途絶え追っ
た。

殺してはいないのだろうが、それでも無力化したのであろう。

リムルもリムルで狼共のボスを打ち倒し、さらにはボスを吸収して
擬態して威圧を放ち、てつきり逃げ出すものと思われた残りの狼共は
なんとリムルに服従してしまった。

まこと魔物はこういう時は強き者に従うという習性があるが、うま
いこと事が運んだようでもよかったものだ。

しかし、その後になにやら小娘によってリムルはスキルの使用を制限されてしまった。

むー……なにやら面白くない展開であるな。

スキルは使ってこそそのものなのに、あまり使うなというのはこれ如何に？

我としてもこの小娘に不満を感じ始めたぞ。

そう思っていた時も我にはあつた。

その夜中の時にまた小娘がやってきて今度は何を話すと思つたら、なんとリムルに謝罪をしてきたではないか。

どのような心変わりをしたのかは知らないが、先ほどの発言も撤回してスキルも自由に使つて構わないという。

なんぞ変化があつたのか俄然我も興味が湧いてきた。

それでリムルは小娘にとあることを聞いた。

「でも。なんかイズクって年上な感じがするよな。ちよつと活発だけど冷静だし、牙狼族の奇襲も読んでいたみたいだし」

「まあ。生前の勘つて奴かな」

「生前？　つてことはやっぱリイズクもー」

「ということはやっぱリムルさんも？」

「転生者!!」

というやり取りを聞いていた我はさらに驚いた。

まさかこの小娘も異世界からの転生者だったとは。

こつとも目新しい出来事が連続で続くと我も驚愕ものよ。

しかも、リムルとの会話に微妙なズレが生じているのを不思議がつてリムルは小娘の世界について聞いていくとなんとまたしても面白いことが判明しおつた。

なんと、リムルとは違う世界の出身らしく、世界総人口の8割が我らのスキルとは別物である『個性』と呼ばれるものを宿していてヒーローとヴィランに分かれて活動しているという不思議な世界であつた。

その中でこの小娘……いや、もうイズクでよいか。

イズクの生い立ちを聞いていくうちに我も少し感傷に耽る気持ちになっていた。

無個性として生まれてしまい、社会から孤立しがちだったというが、フオウという猫と出会う事によってイズクの運命は一気に変化し、オールマイトという大物との出会いで個性を開花させてヒーロー社会に羽ばたいていく。

そしてフオウという猫の業をともに背負い、生涯を捧げて人助けを続けて天寿を全うしたと思っただら……この世界にもともと持っていた個性に、友人達からもらった個性も世界の言葉で統廃合されて、数々の強力なスキルとなっていまのイズクが出来上がっているという……。

それを聞いた私の感想は、一言でいうとすごいというしかなかった。

そして実感した。

イズクが放つ聖なる気配の正体を……。

これは生前の功績がその身に宿っているという事なのだ。

我、納得。

さらにはその中でも強力なスキルなのがスキルを新たに増やすことができる『妖術』に、イズクが成す事すべてに適応される無限に成長できるスキル『無限成長』。

え、なにそれ羨ましい……。

下手すると無限に魔素量も増やせるとかいうものではないか！

なんてえげつないスキルを持つておるのだ！

さつきに魔素が増えたのはこれが原因だったのか。

さらにはこの我をしても未知数であるスキル『仙術』。

私の予測では『治癒者ヘイヤスモノ』として変化したフオウが教えてくれた使用方法以外にもとてつもない力を秘めているに違いない。

まだ名無しでこの状態なのだぞ？

もし、名前を得てしまったらどんな事が起きる事か……。

と、思っていたら突然の虚脱感！

リムル、もしや貴様!?

思った通りリムルはゴブリン達に名付けをしておる。

名付けというのはとても大変な行為なのだぞ!?

しかも我からも勝手に魔素をぶんどっておる。

それでなんとかそれを阻止しようと思って努力していたが、リムルの動きは止まらない。

それでおそらく牙狼族の息子に名付けをしようとしている時であつた。

イズクがある提案をしてきた。

その内容とはイズクの魔素をリムルに渡すというもの。

え？ それって名付け以上に自殺行為なのではないか？

いや、そうだ。『無限成長』でさらに倍になるのであつた！

そこも計算しての発言か！

リムルもそれでお構いなく魔素を受け取っているし。

リムルの魔素も全快したし、魔素の上限も上がったので良かったことであろう。

しかし、そこでただならぬことが起きおつた。

なんと！

我にまで作用したようで私の魔素も少し回復しただけならまだしも、リムルと我となにかしらの接続をしまい、リムルと同格の存在になりおつた!?

いかん。いかんぞリムル。

こやつ成長はなぜかはしらんが将来的にマジで危険かもしれない！

と思つたらリムルはイズクに正式に『イズク』という名を与えた瞬間であつた。

さつき回復したはずのリムルの魔素量が一気に全部持っていかれてスリープモードにまで追い込まれておつた。

我も思わず意識を失うかと思つたわ。

イズクめ。こやつ本当にとんでもないぞ……。

さきほどのランガに使用した魔素量を比ではなかった。

我のも含めてその5倍くらい持っていきおつた。

これはとんでもない進化をするぞ。
イズクの行動には今後も静観していかんとな。

それからリムル達はドワーフの国に向かうみたいだが、なにやら面白そうなのが起こりそうだな。楽しそうであるな。

NO. 012 門の前での騒動

イズク達はやつとの事、ドワーフ王国がある山脈にたどり着いた。
「やっと到着で来たね……」

「そうだね。イズクも今日はランガに乗っていたから楽だったろ？」

「うん。ありがとね、ランガ」

「はっ！ 我が主イズク！」

イズクはランガの毛皮をさすりながらもランガの事を褒めていて、ランガもランガでまんざらでもないのか尻尾をぶんぶん振り回していた。

そして山脈にある大きな門……その隣に人が数人か通れる小さい門があり、そこを通行人が並んで次々と審査を受けつつも中に入っていく光景を見て、リムルは今この場にいる全員でいくのは逆に迷惑がかかるだろうと思ひ、

「リグル君」

「はい。なんででしょうか、リムル様？」

「うん。ここからは俺とイズク……それと案内役のゴブタ君だけで行こうと思う」

「えっ……しかし、大丈夫でしょうか？ リムル様とイズク様の实力であれば害意に晒されることはあるとは思えません……ゴブタ一人だけで大丈夫ですか？」

「まあ、そうね……」

それで少し考え込んでいるリムルをよそにイズクがゴブタの肩に手を置きながらも、

「それじゃゴブタ君の事は僕が守るね」

「イズク様！ いいんっすか!？」

「うん。つい先日の夜に前に絡まれたとか言っていたでしょ？ また弱い魔物だと見られて絡まれるかもわからないしね」

「ありがとうございますっす！」

ゴブタはもうイズクとの会話も緊張せずに話をしているようである。

これでイズクが全盛期であるし、しっかりと成長して出るところは出ていたらゴブタも別の意味で緊張をしていたかもしれない。

それにイズク自身もどこかゴブタの事がどうにも生前の友である峰田のように見えて仕方がなく、つつい守ってやりたいなという気持ちにさせられてしまっていた。

【なんか峰田君みを感じるよね】

『そうだね、フオウ。まあエツチ過ぎないのがゴブタ君の方が良心的だね』

そんな会話をしているイズクとフオウ。

それでリムルもイズクの言い分を承諾したのか、

「わかった！ イズク。ゴブタ君の事をお願いね！」

「了解だよ」

「それじゃお前らはここで野宿していてくれ」

「わかりました！ お早いお帰りを！」

「いつてらっしゃいませ。我が主達！」

リグルやランガ達に見送られながらもイズク、リムル、ゴブタの三人は門へと向かっていった。

門へと向かいながらも、

「それにしても、やっぱり近寄っていくとその大きさに圧倒されるよね」

「だなー。こんな洞窟に一国を築いているなんて、よっぽど堅牢な砦なんだろうな」

「そうっすね。中もすごいっすよ。普通に人間が十年働いても買えないくらいの武器・防具とか売ってますから」

ゴブタのその発言に、リムルとイズクはやはりここでどうしても人材確保を成功しないと息巻いていた。

そんな事を思いつつ、列に並んでいたのだが、やはりゴブタのフラグは回収されるものと神が言っているかのように、

「おいおい。魔物がこんなところにいるぜっ！」

「まだ中じゃねーからここで殺してもいいんじゃないやね？それになんか可愛い獣人もいるし、そいつも魔物の奴隷にでもしちまうか？」
「そうだな。おい、お前ら。荷物を置いて行けよ。それで見逃してやる」

と、どこぞのテンプレのような三下のような二人組にそう言っただけでイスク達は絡まれてしまった。

なんか、とつてもやられ役のようなことを言っている二人組に絡まれちゃった。

こういうのって厄介な奴らなんだよね。

どこかのファンタジー小説とかだとこういう奴らは痛い目を見ないと何度でも復活してきてなにかしらの邪魔をしてくるのがセオリーだからな。

しょうがない。

「イズク。ゴブタの事は頼むぞ？」

「うん。別にいいけど……やりすぎないようにね？」

「了解つと。おい、ゴブタ君……前に教えたルール3は覚えているね？」

「はいっす！『人間は襲わない』！」

「それじゃ少しばかり目を瞑って耳をふさいでおいてくれ」

「……？ よくわかんないっすけど、了解つす！」

それでゴブタが地面に顔を付けて目を耳をふさいでいるのを確認する。

イズクは苦笑いを浮かべているけど、まあいいんじゃないやね？

ルールを決めた俺が真っ先にルール違反をするとところを部下に見せる訳にもいかんっしょ？

だけど、それで無視されているのを気に障ったのか、

「おい！ 雑魚い魔物のくせにこつちのこと無視してんじやねーよ

！」

「雑魚……？それは俺達のことか？」

「てめーらに決まってんだろ！獣人はわからんが、スライムなんか雑魚ちゆうの雑魚だろ！言葉を喋るのは珍しいけどな」

「おいおい。それじゃとつ捕まえて商人に言葉を喋るスライムって言って売り飛ばすのもいいんじゃないか？」

「違いねー！ ついでにそちらの獣人の小娘も一緒に売っちゃまおうぜ！」

あ……？別に俺の事はどうでもいいけど、イズクを、どうするって……？

いまは抑えて抑えて……、

「おいおまえら！今のうちに引くならさっさっきの発言も忘れて許してやるからさっさと順番を守って列に並んだらどうだ？」

「あっ!?!」

よし。挑発にかかった。

すぐに激昂するところが程度が知れているな。

「雑魚のくせになめやがって！俺達を怒らせやがったな!?!」

「ここから生きて帰れると思うなよ!?!」

と、またしても下つ端のような発言を繰り返す冒険者達。

うんうん。普通に上位の存在とあまり戦ったことがない事が伺える。

普通に人語を喋るスライムとか普通なら警戒するくらいする筈なのにそんな素振りすら見せないでいる。

察するに、ここで並んでいる魔物からしかせびったりできない弱いパーティーなのだろう。

後ろの方で三人くらい控えているような感じだし俺の予想はそんなに外れていないとも思うし。

仕方がない。

もうちよいこちらが優位になる様に挑発を繰り返すか。

「雑魚雑魚って……俺がそんなに雑魚に見えるのか？」

「雑魚だろうが！スライムなんて底辺の魔物だろ!!」

「ほうほう……俺がただのスライムに見えると……」

「その通りだろうが！ なめやがって……もう生きて帰らせねーぞ！」

そうやって二人とも武器を抜いちやった。抜いちやったか……。これでもう俺達の方に幾分は分があるな。

遠目で見ていた他の人間たちも巻き込まれたくないと我先にこの場から離れている。

イズクは……欠伸をしている。くそー、俺が頑張っているのに余裕だな。

それでもなにかの予備動作なのか片手を掲げている。

俺が交渉に失敗した時になにかするつもりなのか……？

「ククク……俺がただのスライムだと。いつから俺がただのスライムだと錯覚していたのかね？」

某死神のラスボス級みたいな発言で煽る煽る。

「ただのスライムのくせにえらそうに！」

「その姿が偽物だつてんなら正体を見せやがれ！」

「いいだろう……！ 見せてやる！」

それで俺は擬態を発動して嵐牙狼族に変化する。

でも、あれ？ なんか角が一本増えてね？

調べてみると、どうにも『黒嵐星狼へテンペスターウルフ』というランガの上位種に変化していた。

いまはいろいろと考察は後にして、

「どうだ？ これが俺の本当の姿だ」

ウソだけだ。

だけどこれですこしは怯えてくれるんじゃないか？

なんか黒稲妻とか使えるスキルが増えているけどこんなに使ったらあたり周辺が黒焦げになっちゃうから威圧だけでなんとかするしかないな。

だけど、やつらはバカだったらしい。

「はったりだろ！ 見た目だけ厳つくしてもスライムなのには変わらな
いだろうが！」

「お前らも来い！ 全員でやるぞー！」

そう言つて残りの仲間も呼び寄せてしまうバカ達。

おいおい。普通……こんな大きい魔物に変化するスライムってだけで事案だろう。

それでも攻撃をしかけてくるって……こいつら本当にただのバカなのかもしれない。

それで何度も攻撃を受けてもダメージは受けないけどうざったくなってきたので、威圧をしようとしたその時であった。

『告！ その場で跪き頭を垂れなさい』！！』

なぜかイズクのそんな叫び声とともにバカ共は顔を青くして武器を手放して本当に頭を垂れてしまっていた。

っていうか、あつぶねえー。思わず俺も従いそうになるところだった！

大賢者が「告。レジストに成功しました」と言っているけど今回だけはナイスだ！

見れば周りで見ていた人達も同じように頭を垂れて体を震わせていた。

これはイズクのスキルである『全言語理解&服従』か！

こんな使い方もできるなんて……イズク。恐ろしい子！

思わず紅バラ顔になりそうだよ。

そんなイズクはというと呑気な顔をしつつ、

「ふう……これでよかったかな？ あのままだったらリムルさん、暴発していたかもだし……」

「なにもいえねえ……」

今後、イズクがキレたらこういう事も平気でしてくるって事を肝に銘じておかないとな。

だけど、そんな俺とイズクの行動が門番達にはやはりおかしく見えたらしく、

「おいー！ お前たち、なにをやってんだ!？」

と、門番達が俺達に突撃してきていた。

うん……。

こればかりは言い訳できないね。

被害は最小限とはいえバカども含めて全員あの場で跪いちまってるし……。

俺はすぐさまにスライムの姿に戻ったけど、なんかそれでも門番達は警戒していて、特にイズクに驚愕の目を向けている。

おそらくバカどもは気づかなかったようだけどイズクの聖なる気配にも気づいたのだろう。

「……とりあえず大人しく連行されてください」

「わかりました」

「はい。ゴブタ君、いくよ」

「？ 終わったんっすか？」

イズクにそう促されてようやくゴブタも気づいたのか立ち上がった。

さっきまでの騒動を本当に最後まで約束を守って聞いてなかったゴブタが一番の大物なのかもしれない……。

連行されながらも俺はそう思ったのであった。

NO. 013 詰め所にて

イズクは絶賛リムルに白い目を向けていた。

事を遡る事、警備隊の詰め所に連行されて、リムルが中心になって言い訳をしている場面までの事である。

見ていた人達も含めてリムルは、

『実は自分は魔法少女なんですけど悪い魔法使いにスライムの姿に変えられてしまつて変身も練習中でさっきの姿はその一つだということですよ』

とか、嘘に嘘を重ねたカバーストーリーをでっち上げていた。

それでそのホラ話を聞いていた警備隊の『カイドウ』ももうめんどくさくなつたためにそれでリムルについては報告書を出そうとしていた。

それで聞いていたイズクはリムルに白い眼を向けているのであった。

「リムルもあとが怖い話をしているよねー。世渡り上手なのか怖いもの知らずなのか」

『まあ、この場を凌げればいい事だし……僕達はどうしよつか。素直にスキルの一つですと言つても信じてもらえるかな?』

「リムルと同じでなんとかごまかしたら? イズクは見た目だけだったらただの獣人ではないんだし、ちよつとした服従の発声ができるとかで」

『そうだね』

それでいこうと思つていた時であった。

「それで、次はお嬢ちゃんの方だが……あれはなにかのスキルかね? 獣人だったらなにか特殊なスキルを持っていても不思議じゃねーからな」

「え? そうなんですか……?」

「ん? 知らないのか? もしかしてお嬢ちゃんは『ユーラザニア』出身じゃねーのか?」

「その……ユーラザニアってどこかの国ですか？」

「その様子だと本当に知らないようだな。ユーラザニアってのは獣人の民で構成されていて、そしてこの世界に十人しかいない魔王の一人が統治している国だ」

「魔王……」

それを聞いてイズクはというと、

『なんか、思いもしないところでこの世界の情報が手に入ったね』

【そうだね。覚えておいて損はないかもしれないよ】

そう話し合っていた。

「まあ、服従系の叫びかなんかか？ 跪いちゃまった商人とかに聞いた話だと脳に直接語りかけてきたみたいだって話だしな」

「えっと……まあそんなところですよ」

実際はもつと使い方によれば凶悪な性能なのだが、ここで話す事ではないだろうとイズクはそれで通すことにした。

それでカイドウは報告書を書いているようで手間が省けたなと思っていた時に他の警備員の人青い顔をしながらカイドウの場所まで走ってきて、

「隊長！ 大変だ！ 鉾山でアーサーサウルスが出て、鉾山夫達が何名か傷を負ったらしい」

「なんだと!? それじゃ討伐隊を手配しねえと！」

「そこは大丈夫です！ いま、討伐隊が向かいましたから。だけど怪我人の傷が思った以上にひどい……いま回復薬は戦争の準備で品薄になっちゃまってほとんどないんだ……」

「回復術師はいないのか……?」

「それが鉾山夫にほとんど着いていつちまって、ひよっこしか残っていない……このままだと命も危ういかも知んねえ」

「なんだとお……ガラム達は俺の家族も同然だ。そう簡単にくたばらせてたまるものか！」

それを牢屋の中で聞いていたリムル達はというと、

「なんか空気だな」

「っすね」

「回復術師なら僕もいるけど、どうする……?」

「いや、でも今はイズクの驚異的な治療能力を見られたらどこに連れてかれるか分かったもんじゃない」

「それに関しては僕も同意かも。それじゃどうする……? 僕的にはバレてもいいから行きたいところだけど。でないと生前じゃないけどヒーローじゃないし……」

「イズクの気持ちは俺も分かるからなあ。しゃーない。おい、旦那! ちよつといいか?」

「あ?なんだ? いま、お前たちに構っている暇はねえんだ!」
「まあまあ。そう言わずに」

それでいまもお血相を変えて話をしているカイドウにリムルは話しかけて、先ほどまでリムルがスライムだからと詰められていた樽の中にリムルが作成した回復薬をなみなみとたらふく入れて、

「これ。回復薬だ。これくらいあれば足りるんじゃないか?」

「足りるかって……そもそもこれ、どこから出したんだ……?」

「いまは時間があまりないんだろ? 騙されたと思って使ってみてよ」

「お、おう。お前らここから出るなよ!」

そう言っただカイドウは回復薬の入った樽を仲間と一緒に担いで走っていった。

それを見送りながらも、リムルはそろそろ聞かれるかなと思いつつ身構えていた。

「リムルさん。前は教えてくれなかったけど、さっきの回復薬ってどうやって作ったのか教えてもらえない?」

「別にいいよ。まあぶっちゃけ裏技にも近いんだけどな」

それでリムルはイズクに話していく。

ちなみにゴブタはもう退屈になっていたのかすでに居眠りを始めていて、リムルはある意味ちよつといいかも思っていた。

リムルさんの話を聞いて、大賢者ってすごい性能なんだなと改めて実感できたかもしれない。

もともとヴェルドラさんのいたという魔素濃度が高い洞窟で暇つぶしに捕食していたという薬草。

それを大賢者が解析、作成して回復薬を生成したという。

「そんなこと、フォウでもできないと思うな」

「うん。私もいまの状態が現状でいっぱいだからそこまで知識や技能はできないかな」

「まあ、大賢者様様だな。俺もいろいろと助かってんだ。大賢者がいなくちやきつとなにもできないって言っても過言じゃないよ」

「そっか……そんなにすごいスキルなんだね。他にはなにができたりするの?」

思わず興味本心で聞いてみたけど、リムルさんはすこしうなりながらも、

「どこまで出来るのかは分からないなあ……聞かないと教えてくれないところが結構あるし。ただ、知識に関してはこの世界ではたぶん一番の性能なんじゃないかなと……わからんけど。そういうイズクだって『妖術』や『仙術』とかやろうと思えばなんでもできるスキル持ってるじゃん」

「まあ、確かに……」

僕もぶっちゃけ人の事をとやかく言えない力を持っているんだよね。

特に八百万さんの個性『創造』も引き継いでいるから想像力を膨らませればなんでも作れてしまうかもしれない。

「お互い……身に余る力を持っているよね」

「違いないな。ま、落ち着いたらいろいろと試していけばいいじゃないか」

「そうだね」

そんな会話をしつつ僕達はカイドウさんが戻ってくるまで他愛ない会話をしつつ、リムルさんはスキルの糸でなにかの塔を作ってい

た。

なんかどこかで見たことがあるような感じだ。

これってもしかして……、

「リムルさん。それってもしかして『東京タワー』ってやつ？」

「ん？ そうだよ。ってイズク達の世界にもあつたのか？」

「うん。あつたって記録だけは残っていたよ。過去の遺物扱いになつていたけどね」

「過去の遺物って……それってやっぱ超常が起きた後に暴動とかで壊されちやつたのか……？」

「そこらへんはどうかは分からないけど……個性が出現してから文明は少しの間荒廃したらしいからね」

「荒廃、ね……相当カオスな世界になつてたんだな」

「そりゃね。人という規格が一気に壊れたと言つても過言じゃない出来事だから、オリンピックも公平を保てなくなって形骸化したらしいから」

学校で習つたことだからあながち間違つていないと思う。

「オリンピックもか？　なんで……？」

「たとえば、僕の友達だった人に足にエンジンが付いた人とかいたんだけど、その人が普通の人と一緒に走つたらどうなると思う……？」

「ただの人なんかすぐに置いてかれちゃうな……なるほど。曖昧にだけど理解できた。個性って身体機能の一部でもあつたんだな」

「うん。だからどうしても個性だよりになっちゃうからまともに競技でなんて競えないし、それで法整備とかもかなり面倒になって、僕の生きた時代にはやつとのこと新世界での法律とかも出来上がつていたんだ」

「なるほど……」

イズクの話をつくつも聞いていて話題が尽きないのが面白いところなんだよな。

たとえば他にもどんな個性があったとかだというと特に惹かれたのが個性『東映』。

かのゴ○ラの姿にもなれる力らしく、面白れえ!と思いつつ、確かにそんな世界じゃ新たに法律なんてゼロから作らないとやってられないよな。

他にも『仮○ライ○ー』とか『ウル○ラ○ン』とかいろいろ調べればあったかもしれないとおもうと、本当にアメコミの世界のようで、その実現実がありその人その人によって違う個性で苦しみとかもあつたんだなと考えられる。

新法律で縛られてしまい、その窮屈な世の中で個性ゆえにうまく生きていけないものはみ出し者として白い目で見られてしまい、やがて法を犯してヴィランになってしまうというのはよくある話らしい。

他にもヒーローになるにも資格があつて、それを取らないで個性を無許可に使用して活動しているものは『ヴィジランテ』と呼ばれて良い事をしてもお尋ね者扱いだとか……。

「うへえ……そう聞くとホントにシビアな世界だな」

「そうでしょ? 僕達はそう子供のころから習ってきたから別段苦じゃなかったけど、それでも苦しんでいる人はたくさんいたと思う……」

それでイズクの顔はまだ子供なのにどこか哀愁が見て取れた。

イズクももとは無個性だったというから相当苦しい人生を送っていたんだなと思うと目頭が熱くなってくるようだ。

そんな話をしていた間に結構時間がたっていたのか、カイドウが後ろに三人くらいの男達を連れて帰ってきた。

「助かった。ありがとうー」

そう言つてカイドウは感謝の言葉を言つてくれた。

どうやら回復薬は役に立ったようだな。

「あんたがくれた薬じゃなきゃいまごろ死んでたかもしれない。ありがとう！」

「今でも信じられんけど千切れかけていた腕が何事もなく繋がって治ったんだ。目を疑ったよ」

「……………(こくこく)」

おい。最後の奴、領くのはわかったけどなんか言えよ。感謝されているのはわかるからいいけど。

それで男たちは感謝の言葉を何度もいいながら帰って行って、それから少しして俺達もカイドウに気に入られたみたいで、そんなカイドウの計らいで翌日には釈放された。

よし！ これで自由に動けるな！

頑張らないとな。

リムルとイズクはなぜかいい鍛冶師を紹介するという事の代わりに昨日に与えた回復薬を売ってくれないかとカイドウに頼まれていて、まだこの世界でどの程度の価値があるのかわからないためにあまり気乗りはしなかったのだが、お金になるというのである意味でカイドウの話す通りに交渉が成立して、いくつ回復薬を譲っていたのであった。

「代わりにいい感じにこの世界の流通の流れとか教えてくれませんかね？ なんせただのスライムなんでわからないもので」

「いいっすけど……」

そんな話をしているリムルにイズクはこっそりと思念伝達をして話しかける。

《リムルさん、話は聞くのはいいいけど……自分で作った設定をものみごとに否定しているけど、いいの……？》

《いいって。それにこの世界の常識が知れる機会なんていつ訪れるかわからないんだからこの際聞いておくのもいいんじゃないか？》

《まあ……そうだね》

それでイズクもなんとか納得していた。

確かに情報は力である。

それがなければこの先上手く立ち回りも出来なくて立ち止まってしまう。

停滞はある意味次の考えをすることができないのでかなり危ない。

それならこの場で常識を身につけてもいいのではないか？

そう、納得し、イズクとリムルはカイドウとの話し合いが続けられていった。

そして久しぶりにまともな食事を出してもらえたのでイズクとしては多少はマシになったと実感しながらも大事に頼張っていた。

しかし、そんなイズクの食事風景を見ていたリムルとカイドウ、ゴブタはというと、

「なんか……イズクの嬢ちゃんの食いつぷりは癒されますね」

「そうだろ！ 今まで丸焼きしか食べてなかったから新しい味に飢えてんだろ。俺も味覚があればなあ……」

「イズク様、可愛いつす！」

「ふえつ？」

やはり無自覚に多人数を一気に魅了をしていく体質は生前も含めて治らないものである。

さらにスキルの効果でおそらく威力が倍になっていることから、これからイズクはもし自覚して魅了をしていくと大変な事になるだろう。

……まあ、イズクに限ってそんな事はおそらく起こらないのだろうが……。

それでも、生前に『施しの英雄』とまで言われていたほどにイズクは無自覚ではあるがカリスマを備えている事が伺えるものである。

ドワルゴンに入る前に発した服従スキルも吟味して、言葉一つでいくつもの集団が統制された軍隊の様に動くさまを想像したりリムルはというと、そんなイズクに対して出した感想が、

『これからイズクの手綱もしっかりと握っていかないと大変な事になるぞ』

と、すでにイズクが出しているその可能性の片鱗を垣間見て戦々恐々としているのであった。

そのリムルの想像が実現するのはそう遠くない未来かもしれない……。

うん。

カイドウの紹介でその鍛冶師がいる場所に向かっているんだけど、町の中を案内されている間に中を魔力感知で見る事を繰り返しているけど、やっぱりゴブリンの村と違って文明的だな！

だされた食事も味わって（味は分からないけど）分かったけど、文明レベルが違いすぎる。

イズクが美味しそうに頬張っていたのがいい証拠だ。

おそらく久しぶりに人間味のある食事でありつけたんだろうな……。

今まで動物の丸焼きか干したもののばかりだったからな。

やっぱり味覚、欲しいよな。俺も美味しいものを食べたい！

そんな事をイズクに両手で担がれながらも思っていた。

え……？なんで自分で移動しないのだった？

なんか見た目的にイズクが俺を持っていた方が見栄えがいいんじゃないかって……。

獣人の女の子に持たれているスライム……。

確かに見栄えはいいかもな。

「リムルの旦那。イズクの嬢ちゃん。それにゴブリンの坊主。ここが俺が案内する鍛冶師がいる場所だ」

「おー！・・・ここか！」

なんか飾られている武器もなんか薄く光ってるし！

ここならなんかいい予感がするぞ。直感だけど。

「カイドウさん、ありがとうございます」

「へへ。いってことよ。それよりここからは旦那の番ですからね」

「おう！ しっかりと交渉して見せるさ！」

イズクが礼儀正しくカイドウに俺を落とさない様にお辞儀をしていて、やっぱり根はいい子なんだよなあ……と思う。

それより、よっし！うまく事を運べるように頑張らないとな！

「今呼んできますんで……おい、兄貴！いるか？」

カイドウが中に入っていったので俺達も続いて中に入らせてもらう。

「お邪魔しますー！」

「お邪魔しまーす」

「入るっすー!」

と、中に入ってみたはいいんだけど中には昨日の三人の姿があった。

あいつら、ここで働いていたんだな。

あちらもこつちに気づいたようで「あ!」という顔になっていた。

うんうん。こういうところで縁というのは結ばれていくもんなんだよな。

「あ? なんだお前ら、知り合いか? 獣人の嬢ちゃんにスライムにゴブリン……また変な組み合わせだな」

それから三人がカイドウの兄の鍛冶職人のカイジンに俺達の事を説明してくれていた。

こういう時に顔が効くと助かるよな。

カイドウさんの人の好きで兄のカイジンさんという人も反応してくれたけど、どうにも顔色が悪そうだなあ。

どうしたんだろう?

僕達が来る前にもなにかの作業をしていたみたいだし、邪魔しちゃってるかな?

「すまん。こいつらの恩人なのに今は手が離せなくてな」

「いえ、大丈夫です。それよりなにかお困りですか?」

僕の仙術があればなにか手伝えることがあるかもしれないし、聞いてみるだけ聞いておきたいしね。

そこにあの三人がカイジンさんに、「リムルの旦那達に相談してみないですか?」と話している。

それで少し揉めているけど、リムルさんが、

「話してみてくださいないか?」

と促していて、それでカイジンさんは今悩んでいるであろう事情を

話していく。

内容によると、今週までにロングソードを20本納品しないといけないらしい。

しかもただの鋼の剣じゃなくて、『魔鉱石』という特殊な鉱石で作られた使用者の意思で成長するという剣を作らないといけないらしいんだけど、まだ一本も作れていないらしい……。

なんでも作ろうにも材料がなくて作るに作れないみたい。

うーん……それは大変だ。

カイドウさんも断ればよかつたじゃないか。と言っているけど、どうにもカイジンさんを失職させたいらしいベスターという大臣が王様の前でわざわざカイジンさんを煽ったらしく、断るにも引けなくなってしまうらしい。

そのベスターっていう人、性格が悪そうだなあ……。

それで事情も聴き終えて、どうするかという話なんだけど、どうにもみなさんはリムルさんをあてにしているらしい。

やっぱり昨日の回復薬で普通のスライムじゃないと見られていて、どうにかできるんじゃないかなという感じか。

《リムルさん。どうするの？ なにかあてはある？ その、洞窟で薬草を食べていたんだよね？ もしかして鉱石とかも食っていたり……？》

《イズクは勘がいいな。まあ、食っていたさ。俺の力でどうにかできるかもしれない。でも、捕食する剣が一本もないとあっちゃどうしようもないしな》

《それなら鉱石を渡して一本だけ作らせてみて、それを捕食して複製とかできるかな？》

《まっつてくれ》

それでリムルさんとの思念伝達が一回切れる。

しばらくして、

《大賢者ができるってさ》

《やっぱり大賢者ってすごいね》

となれば話は早い。

少しリムルさんと話し合って、それから、

「事情は分かった。それじゃいつちよこいつで剣を作ってみないか」

リムルさんはそう言いつつ胃袋から鉱石の結晶を取り出していた。それに当然驚くカイジンさん達。

そりやそうだよね。

事情も何も知らなければいきなり高純度の鉱石が出現したわけだから。

それより、ちょうどいいから、

——スキル『解析』、発動。

僕はリムルさんが出した鉱石を解析した。

そして、仙術をためしに創造してみた。

すると思った通りに、僕の手のひらにはリムルさんが出した拳大の鉱石と同じものが出来上がっていた。

「カイジンさん。これも使ってみてください」

「おいおい……。旦那といい嬢ちゃんといい、そんなにポンポンと出せるもんなのか……?」

当然、カイジンさんはさらに驚いていた。

僕自身も内心驚いていた。

複製どころか本物と同等のものまで作れちゃうなんて思いもしなかったからだ。

まあ、それからなんやかんやあつて一晩かけて出来たロングソードは翌日にはリムルさんが捕食して見事に20本作り上げていたので、無事問題は解決したのであった。

ただ……。

《なあイズク……? もしかして仙術を使って俺が出したのと同等のものを創造したのか?》

《うん。解析してやってみたらできちゃった……》

《できちゃったって……やっぱりチートスキルだな……》

《返す言葉がありません……》

リムルさんに相当呆れられてたのは言うまでもなかったです。

ちなみに、リムルさんはロングソード20本作る代わりにカイジンさんを技術顧問に誘っていた。
うまくいけばいいね。

NO. 015 エルフ達と思わぬ出会い

イズクとリムルの二人はロングソードを作ってくれたお礼にカイジン等に夜のお店に招待されていた。

ちなみにゴブタは一人お留守番をされていたので悔しそうな顔をしていたのをイズクは少しの罪悪感を感じていたり。

場所は『夜の蝶』というエルフ達が働いているというお店らしい。それを聞いてイズクはふと思った。

まだ男性であるリムルは分かるがもう生前の生涯を女として過ごしてきた自分は場違いではないのかという疑問。

そんな感じの事をリムルに相談してみたが、

「まあ、大丈夫じゃね？ 薄っすらとでも男の時だった意識が少しでも残ってれば楽しめるだろ」

「そんなものかなー……僕、一応これでも子供を産んだこともあるんだよ?」

「マジ であ!!?それってやっぱ相手は男だったのか!?!」

「う、うん……」

「それって精神的BL体験……いや、でも……それってどうなんだろう……?」

それでリムルはぶつぶつと悶々とした事を考えていたが、イズクは生前に言われ慣れた内容だったのですぐに受け流していた。

そんなリムルをよそにお店に到着したのか先を歩いていたカイジンが先導して、

「それじゃリムルの旦那にイズクの嬢ちゃん、せめてものお礼として楽しんでいってくれ」

お店の扉を開く。

すると中から色とりどりの響きがいい女性の声で「いらっしやいませー!!」と案内された。

すここにはおとぎ話で有名なエルフ達の姿があり、リムルもさつきまでの悶々とした感情もすぐに放棄したのか気分よく案内されていた。

「うわー！ カワイイ!!」

「私が先よう!!」

と速攻で、リムルはエルフの人達にあれよあれよという間に代わり代わりに持たれてお互いに感触を楽しんでいた。

もう、リムルの脳内はお花畑が咲いている事だろうなと遠巻きに見ていたイズクは思っていた。

「あれ？ 獣人のお嬢ちゃんはまだもしかして未成年？ それじゃジューズを用意するね！」

少し丸い顔をした茶色い髪のボブカットのエルフの子がイズクを接待してくれていて、イズク本人は生前を含めれば三桁はくだらない年齢だが、まだこの世界に生れ落ちてから一年も経過していないために未成年には変わらないのだからおとなしくジューズを預かる事になった。

それとイズクはふと思った。

他のエルフの子はリムルに夢中なのに、このエルフの人はどうして自分に良くしてくれるのだろうか……。

リムルとカイジンがなにやら大人の会話をしだしそうになっているのをよそに、イズクはジューズを飲みながらも、

「あの、お姉さんはあっちはいいんですか？」

「え？ うん。私はなんかどうしてかあなたの方がつい気になっちゃって、ね」

それで少し悩んでいるような顔をするエルフの子。

イズクはそれで「そっか」と相槌を打っていた。

「まあ、こんなお店に女の子、しかも子供が来ることの方が珍しいしね。でも、この人……どこか雰囲気というかなんか懐かしい感じがするんだよね。なんでだろう……？」

イズクはそれで少し考え込んでしまっていた。

ん？ 俺がエルフの子達と戯れている間に、なんかイズクが大人しくなっている。

いや、あれはなにかを考え込んでいる感じか？

一緒にいるエルフの事なにかあつたんかな？

思念通話を使って悩みを聞いてみるのもいいんだけど、そう何度も多用してもイズクに対して失礼だしな。

俺は空気が読めるスライムなのだ。

「ねえ、スライムさん。ちよつといい？」

「ん？」

「よかつたらただけど、これやってみない？」

これって？なにか水晶玉を持つてるけど。

はっ!? もしや水晶玉を使ったエロイ妙技をするのか!?

「わたし、得意なんだ。占い」

なあんだ。占いか。

あ。でも、この魔法が存在する世界での占いなんて舐めてかかったら変な結果が出てても信じてしまいそうだぞ。

慎重に対応してもらおう。

「そっちのお嬢ちゃんもよかつたら占ってあげるね」

「あ、ありがとうございます」

それでなにやら悩んでいたイズクも反応したのか振り向いてきた。

「占い、ですか？」

「そ。うーん……やるとしたら運命の人とかどうかかな？」

「面白そうですね！」

おー！ とうやらイズクも乗り気のようだな。
なら、

「それじゃまずはイズクが占ってもらえよ」

「え？ いいの？」

「ああ。俺が占ってもらってももしかしたら同族のスライムかもしれないし……」

と、お茶らけてみるが、マジでスライムだったらマジで笑えないな。

「それじゃ、まずはイズクちゃんでもいいのよね？ いいかしら？」

「はい！」

「それじゃ占うわね」

お姉さんがそれで占いを始めると水晶玉は光って次第に一人の女性の姿が映し出されてくる。

その人はどうやら耳が長い事からエルフのようで、って……あれ？

なんかイズクの隣に座ってるエルフさんに見えない？

「わ、私……？」

「お嬢ちゃんの運命の人はあなたなの？ “ウララ”？」

「ウララ……？」

どうやらエルフのお姉さんの名前はウララというらしい。

そう思えばどこか常に麗らかな雰囲気を感じるというか……。

だけどそれでイズクの表情は一変していた。

なんだ？ なにかあったのか？

「あ、あの……もしかしてあなたは……麗日さん？」

「ウララカ……？ それって……ウツ？」

するとウララさんは急に眩暈でも起きたかのように額を抑えだしていた。

おいおい……？ まさかもしかしてイズクという麗日という人の転生体の人だったりするののか？

しかも今現在失っている前世の記憶を思い出しているとかそんな感じ……。

「ごめんね……なんか調子が悪くなったみたい。ママ、ちよつと下がります」

「わかったわ。ごめんね皆さん」

ママさんがウララさんを連れて行ったけど、これは一波乱ありそうだな……。

それで占いの得意なお姉さんが少し焦った表情で、

「な、なんか微妙な空気になっちゃったけど、スライムさん。続ける……？」

「あ？ そうだなあ……それじゃお願いしちやおうかな」

先ほどの件で少し黙り込んでしまっているイズクの方を見ながらも、占いをやってもらった。

僕の勘違い、にとしては出来すぎている展開だけど、さっきの占いに、そしてウララさん。

僕が懐かしい気持ちを感じた嘘偽りのない気持ち。

きつとウララさんは……。

でも、僕の事は覚えていないみたいだしやっぱり核心には至らない。

僕は今後、ウララさんとどんな顔をして接すればいいか分からない。

期待しすぎても後が残念な事になっても分からないし。

どうしよう……。

【大丈夫だよイズク】

そんな不安な気持ちの時に僕の事を理解してくれる人がいる。

やっぱりフォウは優しいね……。

【もし彼女が本当にあの麗日さんの転生した姿でたとえ前世の記憶を持っていなかったとしても、私はいつまでもイズクと一緒にだからね。私の独占欲が満たせるならそれでもいい。

でも、もし記憶を思い出したら優しく迎えてあげようね】

『そうだね。ありがとう、フォウ』

【うん♪】

少しだけでも気持ちや和らいだところで、僕は意識を浮上させてリムルさんの方の運命の人の映像を見る。

そこには一人のどこか日本人のような顔つきの女性に五人の少年少女達。

子供たちの何人かは女性に向かって泣いているみたいでどこか寂しそう……。

これがリムルさんの運命の人……？

そこでカイジンさんが女性に見覚えでもあるのか、

「その人はもしかして『爆炎の支配者』で有名な『シズエ・イザワ』じゃねえか？」

その、どこかやっぱり日本人のような名前で、どうにも話によると自由組合というギルドの英雄だという。

なんでも若い見た目に反して何十年も生きているとか。

もしかしてこの世界の年齢の概念はもとの世界と違うのかな……？

いや、もしかして生前の僕と同じでなにか歳を取らない秘訣とか裏技があつたり……？

「ありえなくもないよねー。なんせ魔王とか勇者とかもいる世界だし」

『だよね。とにかくこれがリムルさんの運命の人かー』

どこか感慨に耽っていた時であつた。

突然、店の入り口付近から怒声が響いてくる。

「なんだ、女主人！ この店は魔物の連れ込みを許すのか!？」

なんか、どこか物騒な物言い。

一混乱ありそうでこの先が少し不安になった感じだよ……。

「リムルは巻き込まれ体質でも持っているのかな？ イズクも合わせて相乗みたいなの？」

『僕も……って生前を考えれば否定しきれない自分が悲しい……』

とにかくその後僕達はちよつと騒動があつてこの国のお偉いさんと顔合わせする事になる。

どうにかみんなのもとへと帰りたいものだね。